

知恩寺跡

- 福岡県田川郡添田町添田所在遺跡の調査 -

福岡県文化財調査報告書 第259集

2017

九州歴史資料館

県道英彦山添田線改良事業関係埋蔵文化財調査報告

知恩寺跡

- 福岡県田川郡添田町添田所在遺跡の調査 -

福岡県文化財調査報告書 第 259 集

2017

九州歴史資料館

序

福岡県添田町の南部には、出羽の羽黒山、熊野の大峰山と並ぶ日本三大修験道の靈場として名高い英彦山を擁し、江戸時代の最盛期には多くの衆徒と坊が存在していました。そして添田町は、耶馬日田英彦山国定公園の一部に含まれ、英彦山への玄関口ともなっています。

本書は平成 26・27 年度に発掘調査を行った知恩寺跡の発掘調査の記録です。知恩寺は豊臣秀吉の九州平定の折に秋月氏と戦禍を巻き起こした岩石城の戦いによる死者を弔うために興されたとされています。発掘調査の結果、往時の知恩寺の痕跡を確認するには至りませんでしたが、寺の創建を遡る鎌倉時代を中心とした生活の痕跡が確認されました。

本書が、教育、研究、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸です。

なお、発掘調査から報告書作成に至る間には、関係機関や地元をはじめ多くの方々に御協力・助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成 29 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 杉光 誠

例　言

1. 本書は一般県道美彦山添田線改良に伴って発掘調査を実施した、福岡県田川郡添田町大字添田に所在する遺跡の発掘調査の記録である。
2. 発掘調査・報告書作成は、福岡県県土整備部道路建設課の執行委任を受けて、九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は小澤佳恵（第1次調査）、吉村靖徳（第2次調査）が行い、遺物写真撮影は北岡伸一による。空中写真的撮影は東亜航空株式会社に委託し、ラジコンヘリとドローンにより行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は各担当者が行い、それぞれ発掘作業員が補助した。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、秦憲二の指導のもとに実施した。
6. 出土遺物及び図面・写真的記録類は、九州歴史資料館において保管している。
7. 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「後藤寺」を改変したものである。また、使用する座標は世界測地系による。
9. 本書の執筆はⅢを小澤が行い、その他の執筆と編集は吉村が行った。

目 次

I.	はじめに.....	1
1.	調査に至る経緯と調査の経過.....	1
2.	調査・整理の組織.....	1
II.	位置と環境.....	3
1	地理的環境.....	3
2	歴史的環境.....	3
III.	第1次調査の内容.....	6
1	調査の概要.....	6
2	調査の成果.....	6
(1)	掘立柱建物跡	6
(2)	土坑	8
(3)	溝	12
(4)	その他の遺構	14
(5)	その他の出土遺物	19
IV.	第2次調査の内容	21
1	調査の概要.....	21
2	調査の成果.....	21
(1)	掘立柱建物跡	21
(2)	竪穴状遺構	23
(3)	土坑	27
(4)	溝	29
(5)	その他の遺構	32
(6)	層位等出土土器	34
(7)	その他の出土遺物	38
V	おわりに.....	39

図版目次

- 図版1 1 第1次調査I区全景(北から) 2 I区全景(東から)
3 II区下段全景(北から)
- 図版2 1 II区全景(東から) 2 III区全景(北から)
3 1号掘立柱建物跡(西から)
- 図版3 1 2号掘立柱建物跡(南から) 2 3号掘立柱建物跡(南から)
3 1号土坑土層(南から)
- 図版4 1 2・3号土坑(北から) 2 4号土坑(北東から)
3 5号土坑(西から)
- 図版5 1 6・7号土坑(西から) 2 8号土坑(西から)
3 SX-01 池状遺構(北から)
- 図版6 1 SX-01 池状遺構護岸列石(北から) 2 SX-02 盛土遺構完掘状況(北から)
3 SX-02 盛土遺構土層(東から)
- 図版7 遺構等出土遺物
- 図版8 包含層等出土遺物
- 図版9 1 第2次調査区全景(北から・空中写真) 2 I・II区全景(左が北)
3 I区全景(南から)
- 図版10 1 III区全景(左が北・空中写真) 2 III区全景(南から)
3 IV・V区全景(北東から)
- 図版11 1 1号掘立柱建物跡(南から) 2 1号掘立柱建物跡と1号溝(左が北・空中写真)
3 2号掘立柱建物跡(北西から)
- 図版12 1 1号溝(西から) 2 1・2号竪穴状遺構(東から)
3 1～3号竪穴状遺構(左が北・空中写真)
- 図版13 1 2号竪穴状遺構土層(南西から) 2 1号土坑(東から)
3 4号土坑(北西から)
- 図版14 1 5号土坑(西から) 2 溝井状遺構(西から)
3 石列(北東から)
- 図版15 遺構等出土遺物1
- 図版16 遺構等出土遺物2
- 図版17 遺構・層位出土遺物
- 図版18 層位出土遺物
- 図版19 その他の出土遺物

挿図目次

第1図	田川郡添田町の位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	4
第3図	知恩寺跡調査区位置図(1/1,000)	5
第4図	第1次調査区遺構配置図(1/300)	7
第5図	1~3号掘立柱建物跡実測図(1/60)	9
第6図	1~8号土坑実測図(1/30)	11
第7図	掘立柱建物跡・土坑・溝出土土器実測図(1/3)	13
第8図	SX-01 池状遺構実測図(1/80)	14
第9図	SX-01 出土土器実測図(1/3)	15
第10図	SX-02 盛土遺構土層図(1/120)	16
第11図	SX-02 出土土器実測図(1/3)	17
第12図	ピット・包含層等出土土器実測図(1/3)	18
第13図	出土土製品実測図(1/3)	19
第14図	出土鉄製品実測図(1/3)	20
第15図	第2次調査区遺構配置図(1/300)	21
第16図	1号掘立柱建物跡実測図(1/50)	22
第17図	2号掘立柱建物跡実測図(1/50)	23
第18図	1~3号堅穴状遺構実測図(1/40)	24
第19図	1~3号堅穴状遺構出土土器実測図(1/3)	26
第20図	1~5号土坑実測図(1/30)	28
第21図	1~3・5号土坑出土土器実測図(1/3)	30
第22図	溜井状遺構実測図(1/30)	32
第23図	石列実測図(1/30)	33
第24図	ピット実測図(1/20)	33
第25図	その他の遺構出土土器実測図(1/3)	34
第26図	茶褐色土層・遺構検出面出土土器実測図(1/3)	35
第27図	その他の層位出土土器実測図1(1/3)	36
第28図	その他の層位出土土器実測図2(1/3)	37
第29図	出土銅製品・土製品・石製品・ガラス製品実測図(1/2・1/3・1/6)	38

表目次

第1表	土錐一覧1	20
第2表	土錐一覧2	38

I はじめに

1 調査に至る経緯と調査の経過

一般県道英彦山添田線は、耶馬日田英彦山国定公園における英彦山の玄関口に位置しており、数ある観光スポットを結ぶ循環路線となっているが、道路の線形が悪く隘路であることから大型車両同士の離合も困難な状況であった。このため、道路改良事業により整備を行い円滑な通行を確保する目的で事業化された。工事は2期に分けて行い、第1期が平成27年度（延長840m）、第2期が平成28年度（延長560m）に実施され、同年に供用が開始されている。

発掘調査は用地買収の進捗及び工事計画を踏まえ福岡県田川県土整備事務所と調整しつつ対応し、平成26年度（第1次調査）と平成27年度（第2次調査）に実施した。

第1次調査は第1期工事が対象で、は平成25年度に添田町教育委員会が行った試掘調査の結果遺構が確認された箇所である。その後部分的に残されていた未買収地が買い上げられたため、26年7月8日付26田整1280-2号により福岡県田川県土整備事務所長からの執行委任の依頼を受け、7月16日に協定を締結した。そして7月25日に重機により遺構面までの覆土除去を開始し、10月14日までにすべての作業を完了した。

その後、北側の起点から平成26年度に行った1次調査地北端部までの第2期の工事対象区間の用地問題が解決したため、この区間にについて平成27年7月9日に試掘調査を福岡県教育庁文化財保護課が実施した。その結果をもって発掘調査が必要な範囲を確定するとともに、7月16日に事業者と現地協議を行い、年度内に道路を供用する事業計画に基づき、工事に着手する11月を発掘調査完了期限とすることで協議が整った。そして27年8月25日付27田整1739-2号にて田川県土整備事務所長からの執行委任の依頼を受け、同日に協定を締結した。作業は9月3日から重機で北側から遺構面までの覆土の除去を始め、4日に機材を搬入するとともに発掘作業員を投入して遺構検出を開始した。調査区は里道や調査を要しない場所などの区切りによって北側からI区・II区・III区・IV区（調査時はIV-1区）・V区（調査時はIV-2区）とした。北から順に遺構検出作業を進めつつ並行して図面作成作業を行い、すべての作業は11月15日に完了した。



第1図 田川郡添田町の位置図

2 調査・整理の組織

知恩寺跡の発掘調査及び報告書作成にかかる関係者は以下のとおりである。

平成26年度	平成27年度	平成28年度
（第1次調査）	（第2次調査）	（整理・報告書作成）

福岡県県土整備部田川県土整備事務所

所長

嶋田浩史

嶋田浩史

久保尚亮

副所長	伏貫哲雄	伏貫哲雄	松岡栄次
	鬼塚明文	鬼塚明文	野神和孝
総務課長	金丸壽彦	藤本繁喜	藤本繁喜
道路建設課長	池田憲治	池田憲治	西 亮
道路建設課建設第一係長	二村幸勝	二村幸勝	小野吉弘
主任技師（担当）	馬男木和久	馬男木和久	鷗田 翔

九州歴史資料館

総括

館長	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
副館長	伊崎俊秋	伊崎俊秋	飛野博文
参考（H26 兼文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文	
企画主幹（総務室長）	塙塚孝恵	塙塚孝恵	塙塚孝恵
企画主幹（文化財調査室長）		吉村靖徳（調査）	吉村靖徳（報告）
企画主幹（文化財調査室長補佐）	吉村靖徳		伊崎俊秋

庶務

企画主査	山崎 彰	中村満喜子	
事務主査	南里成子	宮崎奈巳	西村知子
事務主査	宮崎奈巳	西村知子	
主任主事			原野貴生
			秦 健太
主事	秦 健太	秦 健太	甲斐進也

調査・整理報告

技術主査（文化財調査班長）	秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二（整理担当）
技術主査（H27～調査研究班長）	小澤佳恵（調査）		小澤佳恵（報告）
技術主査（保存管理班長）			加藤和哉
主任技師			小林 啓

なお、調査にあたっては添田町教育委員会の岩本教之氏に便宜を図っていただいた。また第1次調査で出土した釜については、芦屋釜の里の新郷英弘氏、八木孝弘氏の御教示を得た。

II 位置と環境

1 地理的環境

知恩寺跡が位置する添田町は福岡県の南東部に位置し、東は京都郡、南は大分県中津市、日田市及び朝倉郡、北は川崎町と大任町、東北は赤村、そして西は嘉麻市に接している。

町南部は英彦山を主峰とする山々が東西に連なり南側とは遮断され、この山塊から町の東側・西側を限るように北に向かって山丘が延びている。そして河川はこの山丘の隙間を縫うように北流している。このうちもっとも東側の谷に周防灘に注ぐ今川、中央に彦山川、西側に中元寺川と響灘に注ぐ遠賀川の水系の川が並んでいる。知恩寺跡は彦山川の支流にあたる畠谷川右岸、英彦山から北に派生する山丘の岩石山（標高 440 m）に続く山丘の裾部の標高 99 ~ 101 m付近の斜面に立地している。英彦山など高所の南側の地質は安山岩が主体であるが、岩石山を含む知恩寺跡の一带は花崗岩地帯となる。

2 歴史的環境

添田町内では県営中山間地域活性化基盤整備事業により中元寺川左岸における発掘調査が集中的に行われ、縄文時代から室町時代に至る各遺跡の実態が明らかになっているが、知恩寺周辺地域においてはそれほど調査が進んでいない。

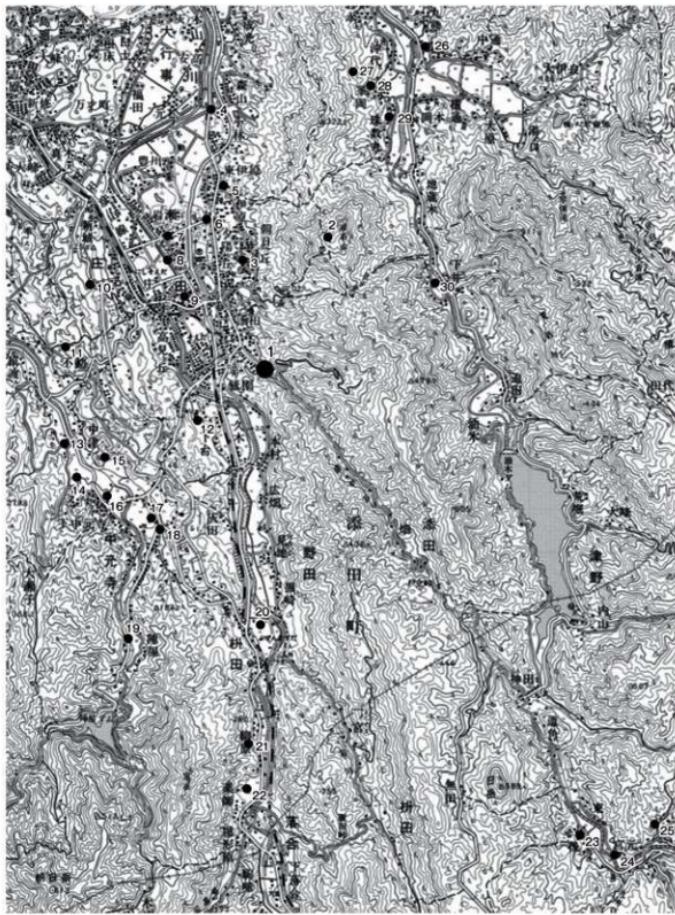
町内の遺跡を概観すると、縄文時代は薬師遺跡で早期の集石炉群、下井遺跡では早期の落とし穴群が確認されている。またズイベガ原遺跡では前期の良好な資料が出土した。さらに後期・晩期になると觀音寺遺跡、奥ノ追遺跡や桟田遺跡、後遺跡など集落の数も増加する。

弥生時代に至ると低丘陵上に生活の場が移動する。中元寺川右岸の岩石山麓の低丘陵上に立地する下町遺跡では前期末の土器が散布していることから当該期の集落の存在は確実である。また、中元寺川左岸には可耕地も広がっていることから多くの集落が展開している。庄原遺跡では銅鏡鋳型や金属溶解炉が出土し、同じく左岸の桟田遺跡や中元寺奥ノ追遺跡で中期の円形住居跡と貯蔵穴が確認されている。

古墳時代の集落には中元寺御手洗遺跡があり、岩瀬古墳群や野田古墳、遠賀川流域の横穴墓としては最南端にあたる土器横穴墓群が存在する。

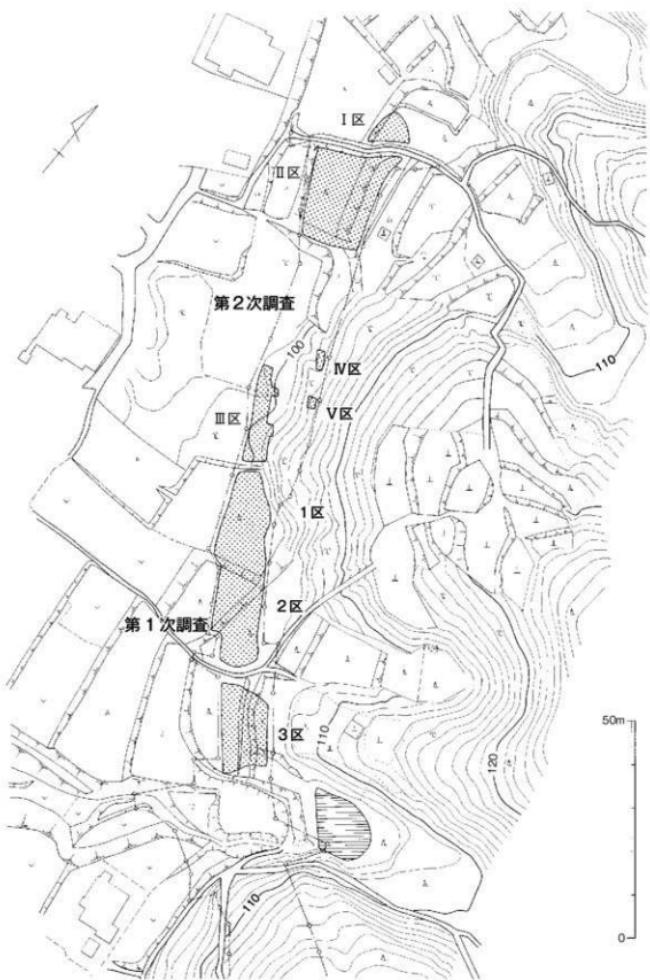
歴史時代では、中元寺川の扇状地に當まれた宮ノ前遺跡で奈良時代～平安時代前半にかけての掘立柱建物跡が確認されるとともに縁釉陶器片も出土している。また、觀音寺遺跡では平安時代後期から鎌倉時代にかけての縦柱で礎板を伴う掘立柱建物跡を含む建物群や井戸、墓が検出され、蛇紋岩製の丸瓶も出土している。同じく中元寺川の最奥部の段丘上に位置する段屋遺跡では、奈良時代から平安時代前期と鎌倉時代後期から室町時代にかけての火葬墓及び炭窯が確認され、莊園関連遺構と目されている。中世に至ると英彦山修験道が隆盛したことによって、西国一の靈場として発達し、その山頂には経塚も營まれ、統一新羅時代の金銅仏や經筒が埋納されている。中世末に至ると英彦山神宮を庇護した秋月氏の要城として岩石城が配置された。岩石城では当該調査地の北方の峰に位置し、豊臣秀吉の九州平定の折に秋月氏一党との激戦が繰り広げられたことで知られる。また近隣には岩石城の出城があったとされ、昭和初期までこの地にあった知恩寺は、岩石城の守備隊に

属していた佐々木平左衛門（正圓）なる人物が、岩石城における攻城戦の敗戦後に死者を弔うために創建したと伝えられる。そして現知恩寺は、大正9年に当該調査地から添田小学校の近くに移転している。



- 1. 知恩寺跡 2. 岩石城跡 3. 夕陽ヶ丘道跡 4. 雨屋道跡 5. 高天原道跡 6. 下町道跡 7. 岩瀬古墳群
- 8. 土器横穴群 9. 豆狸道跡 10. 葉師道跡 11. 金ノ原道跡 12. 野田古墳 13. 平津道跡 14. 奥ノ道跡
- 15. 恵良道跡 16. 観音寺道跡 17. 芝ノ前道跡 18. 御手洗道跡 19. 隣屋道跡 20. 桧田道跡 21. 柳原道跡
- 22. 菜師道跡 23. 後園道跡 24. 旧敷山衆住宅 25. 慈仙道跡 26. 丸熊道跡 27. 利正寺道跡 28. 韓向道跡
- 29. 教珠丸道跡群 30. 下井道跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



第3図 知恩寺跡調査区位置図 (1/1,000)

III 第1次調査の内容

1 調査の概要

第1次調査区は、南北に伸びる狭い谷部の東岸に段状に造成された、幅の狭い平坦面にあたる。北西から南東に向けて斜面を登りながら、計5段の平坦面が造成されており、一番北の造成面を1区、2番目の造成面を2区下段、3番目の造成面を2区上段、4番目の造成面を3区下段、5番目の造成面を3区上段とした。1区下段の遺構面高は約100.0m、2区下段は約101.5m、2区上段が約103.5m、3区下段が104.0～104.5m、3区上段が107.0mほどをはかる。

各平坦面は基本的に水平に造成されており、1・2区は多くの遺構が遺存していて比較的往時の形状を保っていると考えられるが、3区下段は2区上段とそれほど高さに違いがないにもかかわらず全く遺構が検出されなかつたこと、部分的に岩盤が露出することなどから、後世の開発等によりかなり大規模に削られた可能性が高い。3区上段はかろうじて遺構が残るもの、遺存状況から大きく削平されたものとみられる。

1区は、本遺跡における中心的な地区と考えられ、多くの遺構を検出した。主要な遺構としては古代～近世に属する掘立柱建物跡3棟、土坑5基のほか、近世に属する池状遺構がある。また、調査区の全域に数多くのピットが分布していた。

2区は下段と上段に分かれる。下段は大きく削平されたとみられ、遺構はほとんど残存していなかったが、2区下段を平坦面として造成する際に行われたとみられる盛り土状遺構を調査した。一方上段からは数多くのピットが検出された。いずれも遺存状況がかなり良好で、深さのあるものが多く、削平をあまり受けていない状況が察せられた。またこのほか、ごく浅い溝状遺構を数条検出した。しかし、これらが組み合わさって掘立柱建物などの建築遺構となる状況は復元できなかった。

3区下段は上述のように削平がひどく遺構は全く残されていなかった。3区上段からは3基の方形土坑を検出した。おそらく墓坑と考えられるが、上部がかなり大きく削られており、また出土遺物もなく、時期や性格の手がかりはつかめなかつた。

以下、1～3区で検出した遺構群について、種別ごとに報告していく。

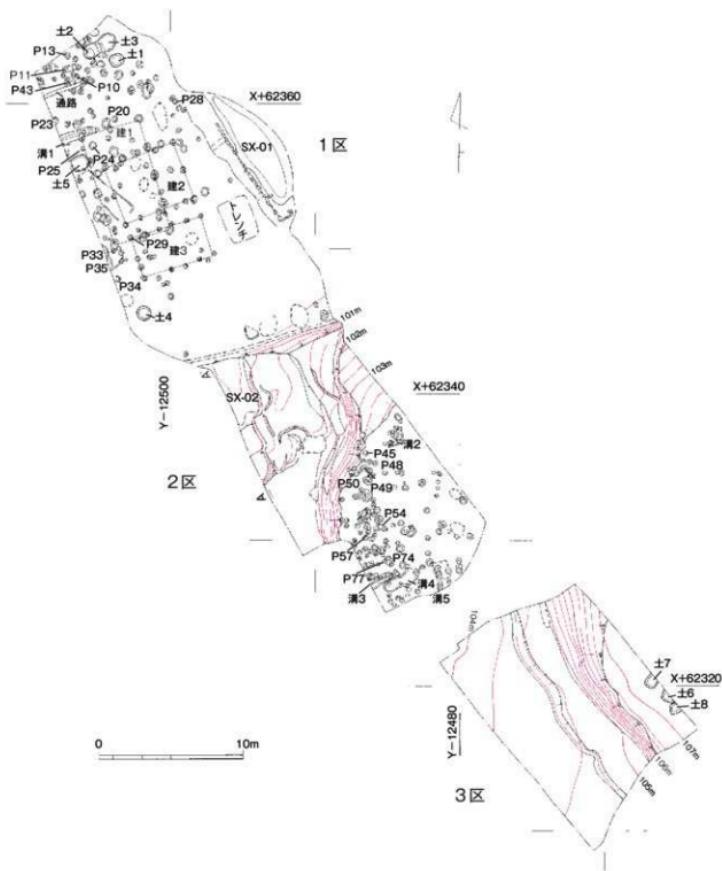
2 調査の成果

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡3棟はいずれも1区より出土した。1号建物跡と、2・3号建物跡がそれぞれ部分的に重複する位置関係にあるが、柱穴同士の直接的な切り合いではなく、切り合い上からの先後関係は把握できない。以下、個別に説明する。

1号掘立柱建物跡（図版2、第5図）

1区の中央東寄りに位置する。4間×2間の南北棟で、側柱建物である。2・3号建物跡と重複する位置関係にあり併存は不可能だが、柱穴同士の切り合いではなく前後関係は判断できない。柱穴は直径60cm程度と大きく、埋土には焼土片を多く含む。規模は8.0m×4.0mほどをはかり、柱穴間の距離は梁・桁とともに約2mの均等配置である。柱穴の深さは50cm程度でやや削平を受けた印象である。土器の小片がそれぞれの柱穴から少しづつ出土しており、図化できる5点を図示する。11



第4図 第1次調査区遺構配置図 (1/300)

世紀後半～12世紀代に比定される白磁片がありこのころの遺構か。1号溝に北西コーナー部の柱穴を切られているが、1号溝は出土土器からは14世紀代に位置づけられ、切り合い関係上も整合性はある。

出土遺物（第7図）

土師器（1～3） 1～3は土師器の小皿である。1は図上で完形に復元できる。2・3は底部片である。底部は平坦で、体部は斜め上方に伸びる。2・3の底部外面には糸切りの痕跡が残る。

白磁（4） 白磁碗の口縁部片である。わずかに内湾しながら斜め上方に伸び、端部をわずかに外に引き出してとがらせる。

炻器（5） 須恵質の甕の胴部片とみられる。小片で径は復元できない。

2号掘立柱建物跡（図版3、第5図）

1区の中央に位置する。4間×2間の東西棟で、側柱建物である。1号建物跡と大きく重複するが前後関係は不明。柱穴は直径30cmほどの円形を呈し、1号建物跡の柱穴と比較してやや小型である。深さもやや浅い。柱穴の位置は特に梁行の柱穴に入りが見られ、柱筋の通りがやや悪い。規模は、梁行が4.9～5.0m、桁行が4.1～4.2mほどをはかり、柱間は梁行がやや短く1.2mほど、桁行が長く2mほどを測るもののはらつきが大きい。出土遺物には土師器の小片があるが図示できるものはない。1号建物跡と近い時期の遺構とみたい。

3号掘立柱建物跡（図版3、第5図）

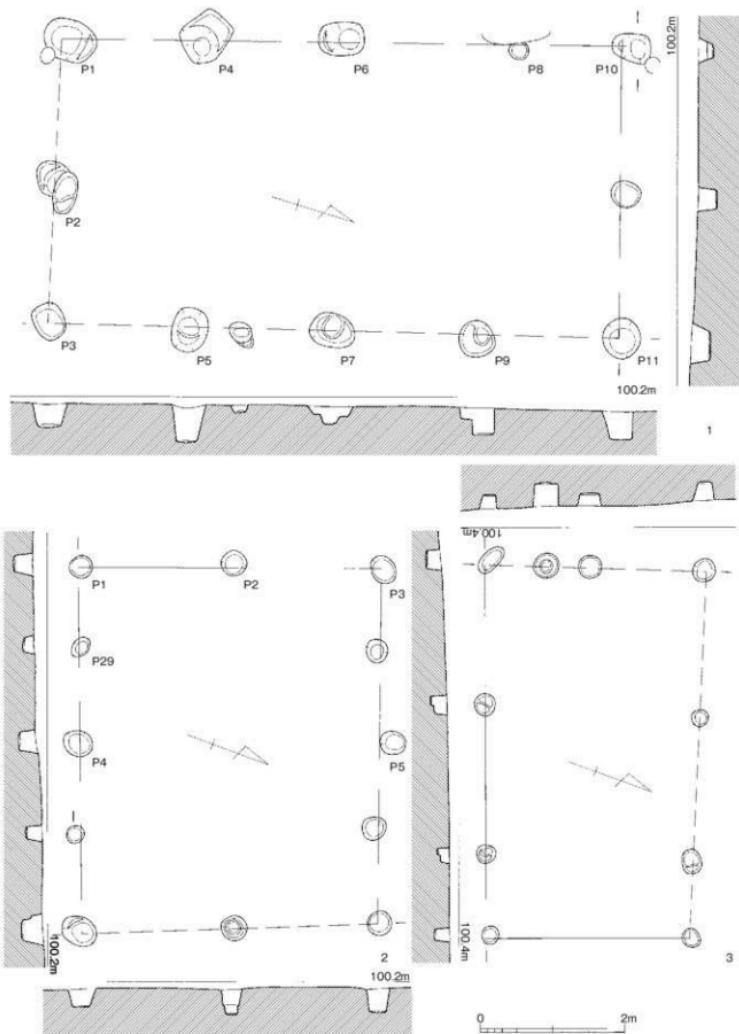
1区の中央やや南寄りに位置する。3間×2間の東西棟で、東側1間分の柱穴距離が短いこと、東端の中央柱が検出できなかったことなどから、2間×2間の東西棟で東側に庇を持つ可能性のある建物と理解した方がいいかもしれない。1号建物跡と重複するが柱穴同士の直接的な切り合い関係はなく前後関係は不明。規模は2間×2間としたときに梁行4.0m、桁行は2.8～3.0mをはかる。柱間距離は梁行が2.0～2.2m、桁行は1.5mほどをはかる。東側のもう1間分は1.2mをはかる。出土遺物には土師器の小片があるが図示できるものはない。1号建物跡と近い時期の遺構か。

（2） 土坑

1区から5基、3区上段から3基の土坑を検出した。平面形状が円形プランのものと方形プランのものがあり、特に3区上段で検出した方形プランの3基は近世墓の可能性が考えられる（後述）。以下、個別に説明を加えていく。

1号土坑（図版3、第6図）

調査区の北東寄りで検出した。北に2・3号土坑が隣接する。直径約1.1～1.2mほどの不整円形の土坑で、深さは30cmほどと浅い。埋土は最上層において1号建物跡の柱穴埋土と類似した焼土を多く含む茶褐色粘質土がやや厚く堆積する状況が認められ、埋没の時期が近接する可能性がある。出土遺物には土師器の小片がビニール袋1袋ほどあるがいずれも小片で、1点が図示できたのみである。



第5図 1～3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

出土土器（第7図）

土師器（6） 土師質の小皿の底部片である。平坦な底部のみ残り径は不明。摩耗しており調整も不明瞭。

2号土坑（図版4、第6図）

1区の最も北側で検出した。東側に2号土坑があり、検出時には2つの土坑がつながってひょうたんのような平面形状を呈しており、切り合い関係が判断できなかったためにそのまま掘り下げたが、30cmほど掘り下げた段階で2基の円形土坑となった。検出時に切り合いの線が確認できず、土層でも切り合い状況が認められなかったため、同時に埋没した可能性が高いものと考えられるが個別に報告しておく。特に上層で、1号建物跡の埋土とよく類似した焼土を多く含む埋土が確認されたことから、埋没の時期が1号建物跡と近い可能性が考えられる。下層の埋土は地山である明黄褐色粘土質土が厚く堆積しており、掘削土により埋め戻された可能性がある。なお、底面付近からは當時湧水があり、素掘りの井戸の可能性もある。出土土器は2点ほど図示したがいずれも中世に属する。なお、上述のような調査経過をとったため、2・3号土坑の上層出土遺物の一部を2号土坑出土として取り上げることになった。

出土土器（図版7、第7図）

瓦質土器（7・8） 7は三足鍋の足部である。表面は暗灰褐色を呈し、指ナデの痕跡が明瞭に残る。8は鍋の口縁部片である。小片のため径は復元できないが比較的大型品である。内面には横方向のハケ目状施紋が残る。

3号土坑（図版4、第6図）

1区の最も北側で検出した。西に2号土坑が隣接し、既述のとおり検出時には一体の遺構としていたが、掘り下げ中に2基の土坑が縁がつながったものと判断した。このため、本遺構の上層より出土した遺物は2号土坑出土として取り上げた可能性がある。埋没状況から、両遺構は埋没のタイミングが一致する可能性が高く、時期の判断根拠にはなる。本遺構は2号土坑と比べてかなり浅く、底面より湧水も認められない。平面形状は類似するが性格は異なる可能性がある。出土遺物には土師器を主体とする土器の小片がわずかにみられ、うち1点を図示する。

出土土器（第7図）

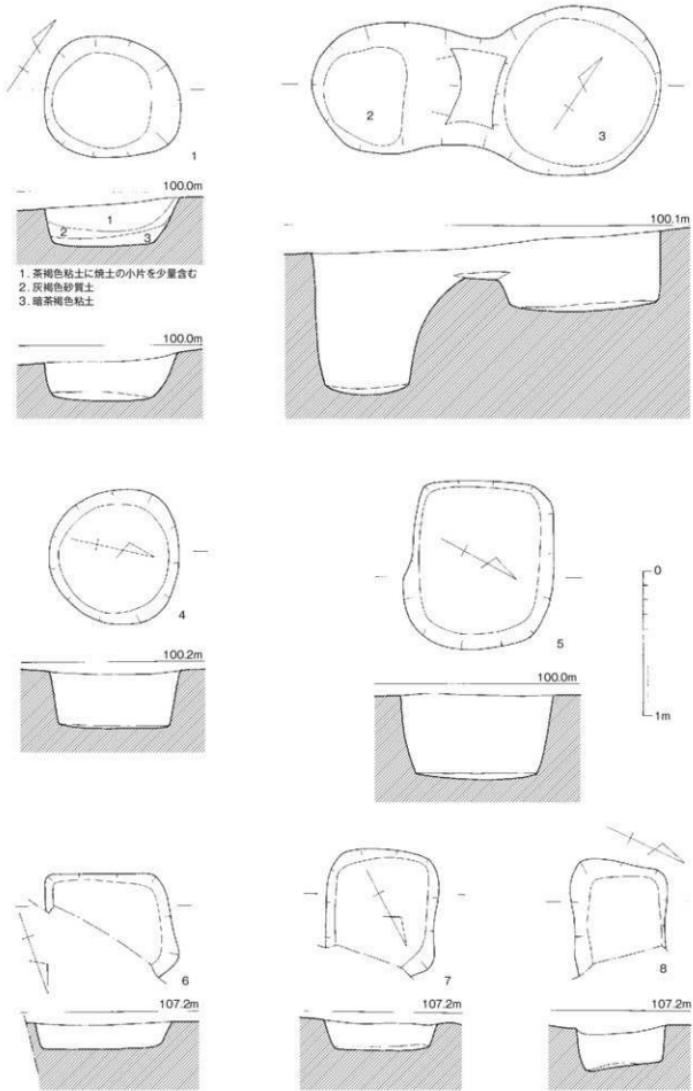
瓦質土器（9） 鍋の胴部片か。小片で径は復元できない。外面に断面形状が方形の突帯を1条巡らせる。

4号土坑（図版4、第6図）

1区の南西端部で検出した。平面が直径1.2mほどの大略円形状を呈する土坑で、残存深さは0.5mほどをはかる。埋土は1号掘立柱建物跡の柱穴に見られた焼土を多く含む粘質土であり、埋没の時期が近い可能性がある。出土遺物には土師器の小片が多く見られ、うち4点を図示した。いずれも小型の土師皿であろう。出土遺物などから、中世に属する遺構と考えられる。

出土土器（第7図）

土師器（10～13） 10～13はいずれも土師皿の底部片である。小片で、口縁部が遺存するものは



第6図 1~8号土坑実測図 (1/30)

ない。底面は平坦で、12・13の外面には糸切り痕跡が残る。器壁は摩耗が著しいが指ナデ調整痕がみられる。

5号土坑（図版4、第6図）

1区の北西部で検出した。平面形状は隅丸方形を呈し一辺の長さは約1.3～1.4mほどをはかる。底部は平坦で、深さは約0.8mである。試掘トレンチが重なっていたこともあり、付近の遺構面は1区の中でも最も低くなっていて、しばしば帶水して、当初付近の調査が進まなかった。このため、本土坑に一部重なる位置に水を集めるための穴を掘ってしまい、一部遺構の壁を破壊してしまったが、全体的にはよく残っている。埋土は暗褐色粘質土でやや柔らかい。出土遺物には近世の染付があり、近世の遺構であろう。

出土土器（第7図）

陶磁器（14～17）14は染付の皿である。波形口縁で、やや細い高台を持つ。器高は皿にしてはやや高く、体部の湾曲は強い。胎土は白色で精良、釉はやや青みがかった透明で、紺色の顔料で内外に草花文を描く。15・16は徳利であろう。胎土や釉の色調などはよく似ていて同一個体の可能性もあるが径にやや差があり別個体として示している。ともに内面に水引き痕をよく残す。黄白色の胎土に透明釉を非常に薄くかける。17は皿の底部片か。淡黄白色の胎土に透明釉をかける。

6号土坑（図版5、第6図）

3区上段で検出した。6～8号土坑が3基並ぶ中で、中央に位置する。平面形状は恐らく長方形と見られるが、一部が東側の調査区外に広がっており全形は不明。深さは0.2mときわめて浅い。埋土は地山とよく似た黄褐色砂質土で、地山由来と見られる風化礫を含む。出土遺物はない。

7号土坑（図版5、第6図）

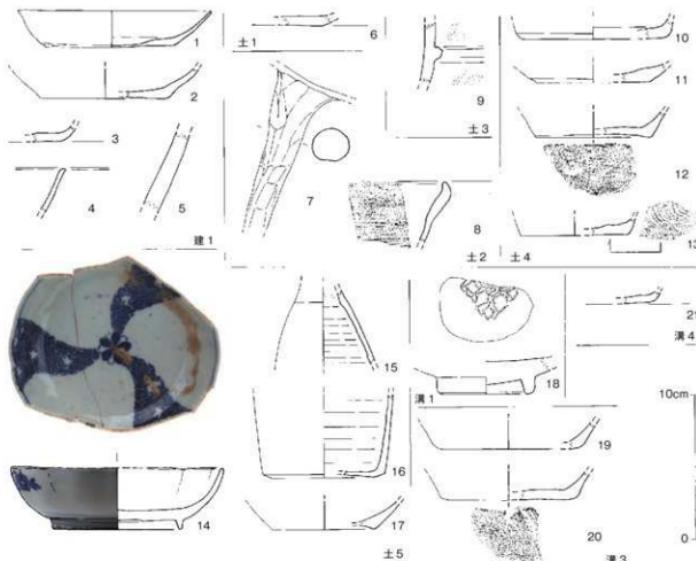
3区上段で検出した3基の土坑の中で最も北に位置する土坑である。平面形状は恐らく長方形と見られるが、一部が東側の調査区外に広がっていて全形は不明。深さは0.2mときわめて浅い。埋土は6号土坑と共通する。出土遺物はない。

8号土坑（図版5、第6図）

3区上段で検出した3基の土坑の中で最も南に位置する土坑である。平面形状は恐らく長方形と見られるが、一部が東側の調査区外に広がっていて全形は不明。深さは0.3mときわめて浅い。埋土は6号土坑と共通する。出土遺物はない。なお、6～8号土坑の所在する3区上段は幅のせまい平坦面を形成しており、段状に東に数枚の平坦面が連続する。この調査区外の平坦面上に数基の近世墓の墓標が遺存していたことから、6～8号土坑も近世墓の墓坑である可能性が考えられる。

（3）溝

1区で1条、2区上段で4条の溝を検出した。1区で検出した1条を除き、ごく浅く短い溝状遺構であり、土層も分層できなかった。



第7図 掘立柱建物跡・土坑・溝出土土器実測図 (1/3)

1号溝（第4図）

1区の北西部で検出した。1号建物跡を切っておりこれより新しい。埋土は単層で、焼土の小片を含む粘質土からなり、1号建物跡などと大略同時期の遺構であると考えられる。深さはごく浅く、東側は削平により失われている。出土遺物には土師器の小片が少量あり、1点を図示した。埋土や出土遺物などから中世期の遺構であろう。

出土土器（第7図）

青磁（18） 青磁碗の底部片である。高台部含む全面を青緑色の釉で覆う。見込みに片彫りで草花文を描く。14世紀代か。

2号溝（第4図）

2区上段の北東隅で検出した。長さ1.2m、深さ15cmほどの小溝で、略東西方方向に伸びる。出土遺物は土師器の小片がごくわずかあるが、図示できるものはない。

3号溝（第4図）

2区上段の南西隅で検出した。長さ2mほどの溝で、西に行くほど深くなる一方、北側は浅くなつて途切れています。削平されたものとみられる。土師器の小片がビニール袋1袋ほど出土しており、うち2点を図示する。

出土土器（第7図）

土師器(19・20) 19・20は土師質の小皿である。底部付近が残る小片で全形は不明。底部は平底で、20の外面に糸切り痕跡を残す。

4号溝（第4図）

2区上段の南側で検出した。長さ約2m、幅約1mでごく浅い。出土遺物は土師器の小片がごくわずかにみられ、うち1点を図示した。

出土土器（第7図）

土師器(21) 土師皿の底部片である。小片で全形は復元できない。器壁は摩耗していて調整は不明。

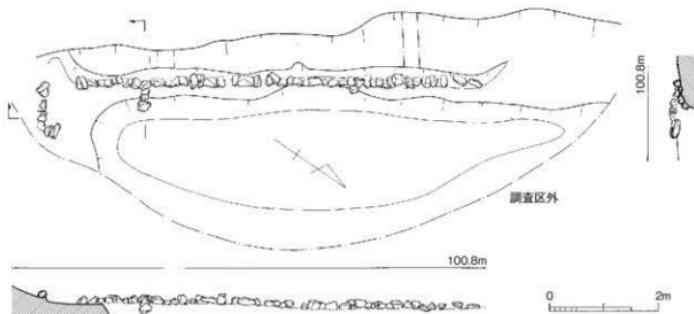
5号溝（第4図）

2区上段の南側で検出した。長さ約1.5mではば東西に伸び、南側の調査区外に続いている。深さは最も深い部分で30cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

(4) その他の遺構

SX-01 池状遺構（図版5・6、第8図）

1区の東側は急傾斜の登り斜面となっている。その麓部を掘り込むようにして、南北に細長い池状遺構が検出された。検出長は約20m、幅は最大5mほどで、本来の規模も恐らくこれと大きなかわりはないと思われる。深さは最大で40cm程度とさほど深くないが、池の内部は常に多量の湧水があり、泥が堆積していて、全掘することは出来なかった。池の西・南岸には小児頭大の礫を1段・1列に並べた配石があり、これが池の範囲を示していたものとみられる。排水施設は検出できなかつたが、削平された可能性も考えられよう。一定程度の削平があったとすれば、配石も本来数段が存在し、石垣状の護岸を形成していた可能性もあるが、明らかに出来なかつた。出土遺物には図示した近世陶磁器の他、ビール瓶や薬瓶などのガラス類があり、近代まで埋没していなかつたと考



第8図 SX-01 池状遺構実測図 (1/80)



第9図 SX-01出土土器実測図 (1/3)

えられる。もとこの地には現在添田町街部にある知恩寺が戦前まであったともいい、これに伴う施設の可能性もある。

出土土器（図版7、第9図）

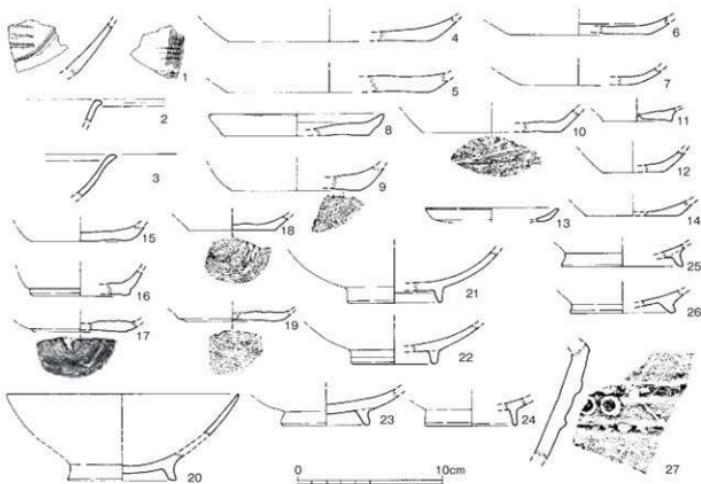
施釉陶器（1） 陶器の盤である。図上ではほぼ完形を復元できたが遺存部位はごく少ない。底部は平底で低く幅広い高台を持つ。体部は半球形に広がり、口縁部は玉縁状をなす。胎土は暗灰色を呈し、底部高台内側の無釉部は赤茶褐色を呈する。釉は濃い灰緑色を呈する。中世の資料で舶載品か。磁器（2～17） 2～4は皿である。2はやや大きい皿で波形口縁をもつ。3・5は中型の皿で、やはりともに波形口縁と低い高台を持ち、底部中央外面を一段高く仕上げる。いずれも染付で、胎土はわずかに青みがかった白色で精良、釉はやや青みがかった透明で顔料は濃紺～青。8は小型の皿。胎土はやや青みがかった白色で精良、有は薄い緑がかった透明色で内・外面ともに絵を描かない。5～7・9は小型の碗である。6を除き、胎土は白色で精良、釉はわずかに青みがかった透明釉で、濃青色で草花文などを描く。6は濃紺の釉に白色を用いて草花文を描く。10・11は合子で、10が蓋、11が身である。形状や文様からセットとみられる。胎土は白色で精良、釉は透明でやや薄めの青色で草花文を底部を除いた外面全体に描く。12～14は蓋で、いずれも小型のものである。12は暗灰色の胎土にやや緑がかった透明釉を乗せたもの。口縁部は暗褐色の釉が巡る。釉には貫入が認められる。13・14は染付で、やや青みがかった透明釉の下に青色の顔料で草花文や雷文を配する。15～17は盃である。16は白色の胎土の上に明緑色の透明釉を被せ、下に緑・茶・白で草花文を描く。15・17はわずかに青みがかった透明釉で外面に草花文などを描く。

陶器（18） 18は陶製のおろし器である。土製品の頂で報告すべきかもしれないが一括性を重視しここで述べておく。胎土は黒色で素焼き、釉は見られない。持ち手部分を欠損する。機能面は数条の突帯を鉄状の工具で切って歯にした状況を呈する。

ガラス器（19～22） 19・20は目薬の瓶。ともに無色透明で型作りの合わせ目をもつ。19は外面に「目薬 精騎水」、20は底部に「A」の字をエンボス加工で記す。21は水薬の瓶。外面に丸開みで「峰地炭礮医院」の文字と目盛りをエンボス加工で記す。無色透明で型作りの合わせ目を持つ。22は茶色のピール瓶。型作りの合わせ目がなく、吹き技法により製作していて、器壁調整の際の擦痕が外面に残る。



第10図 SX-02 盛土遺構土層図 (1/120)



第11図 SX-02出土土器実測図 (1/3)

SX-02 盛土構造 (図版6、第10図)

2区下段の表土直下は標高約1020mで平坦面を形成しているが、この平坦面の北西側は盛土により形成されている。この盛土構造をSX-02とした。盛土施工前の旧地形は調査区西側に向かって傾斜する斜面状の地形をなしており、これを埋めるようにして最大0.7mほどの厚さの盛土を行っている。盛土は南が高く北が下がる自然地形に沿った形で盛られており、一見自然堆積にも見えるが、層中に地山ブロックを多く含むなどの特徴もあり人為的なものとみられる。盛土中からは土師器の小片を中心とする土器が多く出土しているが、図示出来る資料は完形に復元できない小片がほとんどである。出土遺物から、中世のものとみられる。

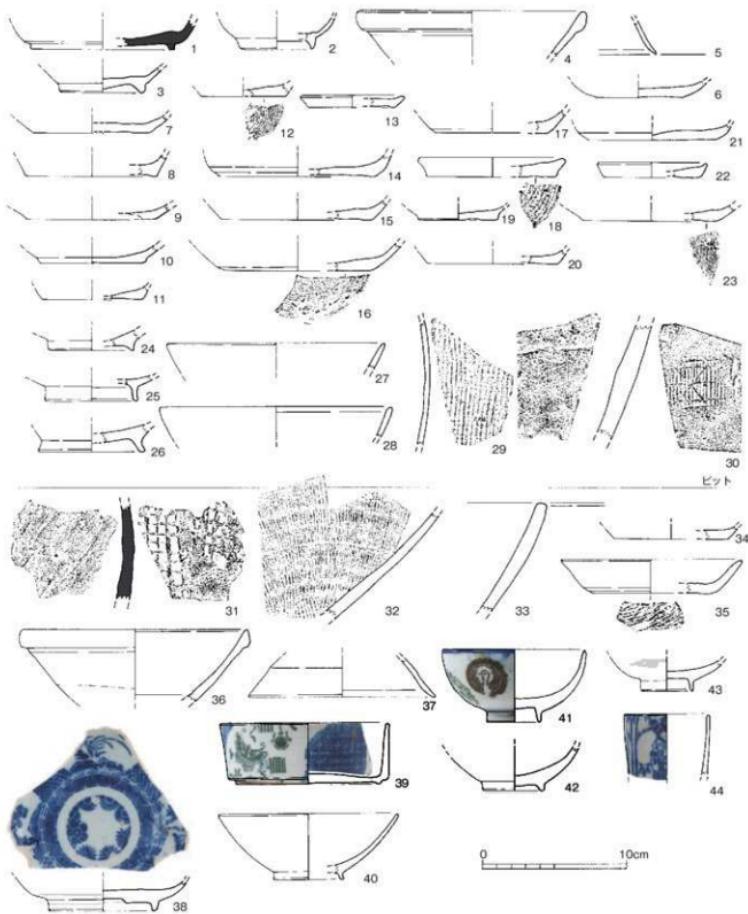
出土土器 (第11図)

青磁 (1・2) 1は龍泉窯系青磁碗の脣部片。櫛状の工具で内外に文様を刻む。2は同じく龍泉窯系青磁碗の口縁部片。口縁端部は上面を平坦に仕上げ、外面をわずかに外に突出させる。小片で径は不明。

白磁 (3) 3は白磁の皿の口縁部片か。小片で径は復元できない。口縁部をわずかに外湾させながら引き出す。

土師器 (4～26) 4～19は土師皿の底部片。図上で完形に復元できるものはない。いずれも平坦な底部と斜めに短く開く体部を持つ。9・14・17～19は底部外面に糸切り痕跡を持つ。10は底部外面に板圧痕が認められる。他は摩耗していて器壁調整は不明。20～26は高台を持つ碗。20は複数の破片を同一個体とみて図上復元したもの。他は高台付近のみが遺存する。高台の断面は比較的高いものが多い。

瓦質土器 (27) 瓦質の火鉢の胴部片か。小片で径は復元できないが大型品。2条の突帯を巡らせ、その間に円形のスタンプを連続で付す。



第12図 ピット・包含層等出土土器実測図 (1/3)

(5) その他の出土遺物

ピット出土土器 (図版8、第12図)

1区・2区上段より多数のピットが出土した。本来であれば複数が組み合わさって何らかの構造物等を形成していたものであろうが、残念ながら復元することが出来ず、ピットとしての報告に留まらざるを得ない。多くのピットから、少量の遺物が出土した。図示できる遺物はほぼすべて中世に属する遺物で土師皿が多数を占める。これらの出土遺物のうち、図示に耐えるものを報告する。須恵器(1) 1は高台付の环身の底部片である。底部は平坦で、断面がやや外に踏ん張る高台を付す。P45出土。

青磁(2・3) 2・3は龍泉窯系青磁の小碗である。2は釉がかなり厚くかかる。見込みの底胴部境に1条の沈線を巡らせる。2はP54出土、3はP11出土。

白磁(4～6) 4は白磁碗の口縁部片。端部を玉縁状に肥厚させる。5は蓋の口縁部片か。端部は釉搔き取り。6は小皿の底部片か。4はP35出土、5はP57出土、6はP24出土。

土師器(7～27) 7～23は土師皿である。底部は平坦で、短く外反する口縁部が付く。7はP15、16・18・21・23の底部外面には糸切り痕が認められる。他は摩耗して調整不明。7はP20、8はP23、9はP28、10・11はP25、12はP29、13～15はP33、16はP34、17はP35、18はP43、19はP50、20はP54、21はP74、22・23はP77出土。24～26は底部に高台を付す碗の底部片、27はおそらく同型の碗の口縁部片。24は高台断面が低い三角形状を呈してやや新しく、ほかは細くや高い。24はP35、25はP61、26はP67出土。

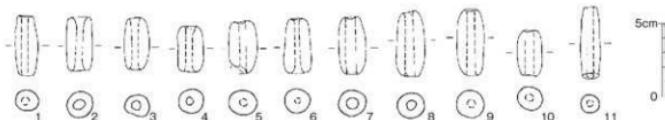
瓦質土器(28・29) 28は27と同型の碗の口縁部片。P49出土。29は大型の壺の胴部片か。外面に格子目タタキがよく残る。P10出土。

炻器(30) 表面赤褐色、内面暗灰色の色調を呈する胎土で、堅く焼き締まった土器。大型の壺の胴部片か。内面には粘土帯接合痕跡が残り、外面には廉状文と×印を組み合わせたスタンプが見られる。P13出土。

包含層等出土土器 (第12図)

ここでは、表土中・遺構検出中・攪乱中などから出土した、遺構に伴わない土器について報告する。須恵器(31・32) 31は大型の壺の胴部片か。小片で径・傾きは不明。外面に格子目タタキ、内面にはハケメ痕跡がよく残る。32はすり鉢の胴部片。小片で径は不明。内面全体にハケメ状のスリ目を施す。ともに遺構検出中の出土。

土師器(33～35) 33は土師質の大型の器種の口縁部片。大鉢か。素口縁。34・35は土師皿。ともに底部に糸切り痕跡を残す。遺構検出中の出土。



第13図 出土土製品実測図 (1/3)

白磁（36・37）36は玉縁の碗の胴上位～口縁部片。器壁外面下位は露胎。37は蓋の口縁部片か。中位に弱い段があり、口縁端部内面は釉を剥がす。ともに1区遺構検出中の出土。

陶磁器（38～44）38は染付で皿。見込みに草花文。39は底部が平坦で口縁部が直上に立ち上がる器。染付の磁器で外面に緑色で蝶などを描く。口縁部は釉を搔き取っており蓋付か。38・39は表採品。40～43は碗。いずれも高台を持

つ。部が斜めに伸びる40と、強く湾曲する41がある。40・41・43は磁器で染付、42は陶器で緑黄色の化粧土仕上げか。40は表採、ほかは1区遺構検出中の出土。44は猪口の口縁部片か。まっすぐ上方に立ち上がる。染付の磁器で、竹林に人物像を描く。

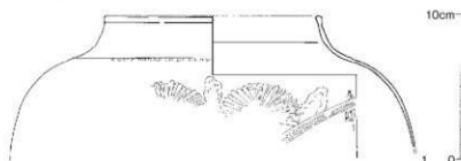
土製品（第13図）

土錘（1～11）1～11は管状土錘である。1～10はやや太さがある丸んぐりした形状のもの、11は細くて長いもの。重量は完形資料で最も軽い10が7.3 g、重い9が15.0 gをはかる（第1表）。

その他の遺物（図版8、第14図）

鉄器（1）1は鋳造の湯釜。いわゆる真形である。口縁部～胴部最大径付近までが遺存する。口径は15.2cm、胴部最大径は28.2cmをはかる。胴部は強く膨らみ、肩部で屈曲して頸部は強くすぼまり、口縁部は短く上に伸びる。胴部はきわめて薄く作る。口頭部境の内面に浅い段をめぐらせる。肩上部外面に沈線状の低い段を形成しその直下に陽刻の列点をめぐらせる。段より上位すなわち頸部以上は胴部よりやや厚くなり、口縁部付近はさらにやや厚くなるが、明瞭な段は形成しない。胴部最大径付近に菊花を2つ配し、周間に小型の葉を少なくとも2枚配す。右の花輪に一部重なるように、内部に細かい横線を刻んだ長い棒状の文様を斜めに配しており、籠あるいは流水表現の可能性がある（実測図には籠として表現している）。表採品。

芦屋町芦屋釜の里の新郷氏・八木氏によれば、鋸の進行状況や雲間気から素材は和銛、（特に口縁部付近の）形状などから、越前鋸物師により近世～近代に製作された品である可能性があり、茶の湯釜としてはやや大型であることから、湯釜と位置づけることが妥当とのこと。また、籠・流水はともに茶湯釜において菊とセットで採用される文様として一般的とのことである（2016年12月6日教示）。



第14図 出土鉄製品実測図（1/3）

遺物番号	出土遺物	長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
1	SA-02	4.2	1.6	4.5	9.6	
2	P55	3.7	1.8	5.0	11.4	
3	P55	3.5	1.8	5.0	8.0	
4	2区検出中	3.2	1.8	4.5	8.7	
5	2区検出中	3.7	2.0	4.0	9.7+	一部欠損
6	2区検出中	3.8	1.7	3.0	10.5	
7	1区検出中	3.9	1.9	6.0	12.5	
8	1区検出中	4.3	2.0	5.0	13.4	
9	2区検出中	4.6	1.9	5.0	15.0	
10	2区検出中	3.2	1.7	5.0	7.3	
11	2区検出中	5.0	1.4	4.0	8.3+	一部欠損

第1表 土錘一覧 1

IV 第2次調査の内容

1 調査の概要

第2次調査区は第1次調査区の北側に隣接する。第1次調査区同様、南北に延びる狭い谷部の東岸に段状に造成された、幅の狭い平坦面に立地している。この段による平坦面及び里道の区切りによりI～V区までの区割りを行った。調査ではI～III区において2間×4間の掘立柱建物跡とそれに伴う溝、土坑、多数のピットのほか、水溜造構等を検出した。また、対象地の南東側のIV区・V区は東側から丘陵が急傾斜で迫っているため造構は存在しないと思われたが、僅かな平坦面が認められたためトレンチを設定して造構の有無の確認を行った。その結果、近代の導水施設以外に造構は存在しなかったものの、中世～近世にかけての遺物が整地層中に多く含まれていたことから当該期の造構が丘陵上位（東側）の事業用地外に広がる可能性が高い。造構面の標高はI区・II区が99.0～101.5m、III区が98.5～100.0m、IV・V区が104mほどを測る。なお、II区とIII区の間は谷部にあたり造構は存在しない。今回の調査で確認できた造構の時期は13世紀代から14世紀代に及ぶ。

2 調査の成果

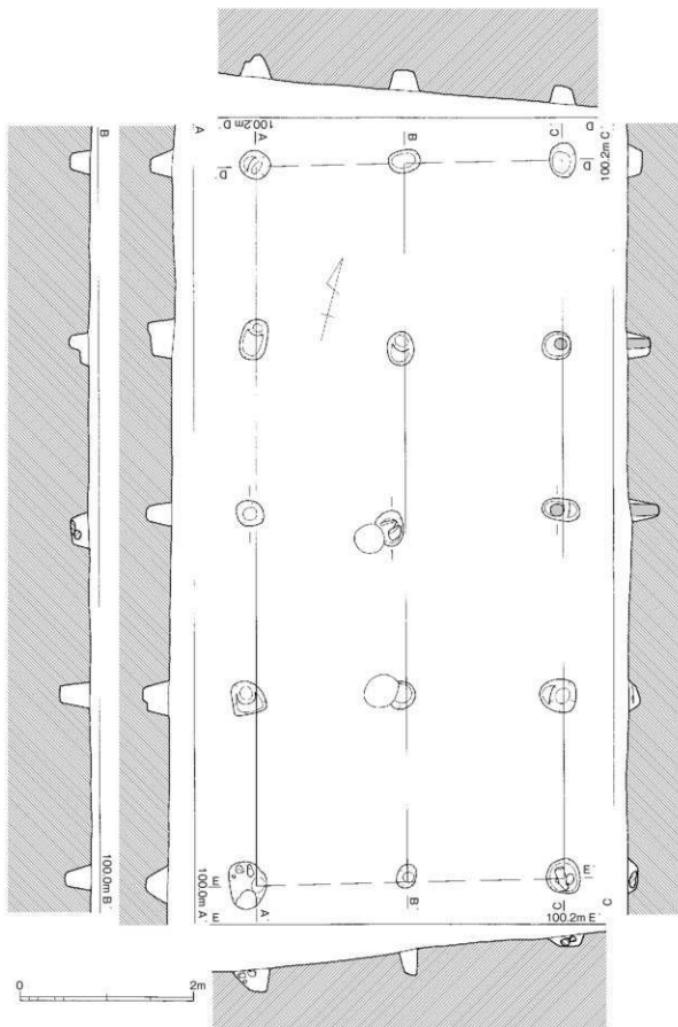
（1）掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版9・11、第16図）

II区の西側で検出した4間×2間の南北棟絆柱建物跡である。東から西に向かって傾斜する斜面部を切り土して



第15図 第2次調査区造構配置図 (1/300)



第16図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/50)

設えた平坦面に建てられている。建物の南側と東側には1号溝と2号溝が開削され、1号掘立柱建物跡に伴うものとみられる。建物の規模は桁行8.3m、梁行2.5mである。柱痕跡は一部に残っていたが、多くの柱穴では確認できていない。柱掘方の心を柱位置と想定した場合、東側柱の柱間は北から2.1m、1.9m、2.15m、2.15m、西側柱の柱間は北から2.1m、2.15m、1.9m、2.15mを測る。中央の柱列の柱間は北から1.85m、2.15m、2.1m、2.2mとややばらつきがあるため床束と考えられないこともないが、柱穴の深さも側柱と大差ないことから総柱建物と解釈しておきたい。梁行は北側が東から1.8m、1.7m、南側が1.8m、1.7mを測る。このことから桁間は7尺等間、梁間は6尺等間

に復元される。柱掘方は径20~30cmの円形ないしは長円形で、柱掘方の底面は地形に沿って東から西に低くなっている。また、二つの掘方の底面に礎盤とみられる礎が据えられていた。

出土土器（第25図）

白磁（1）碗の口縁部。胎は灰色で、乳白色の釉がかかる。貫入がみられる。

2号掘立柱建物跡（図版11、第17図）

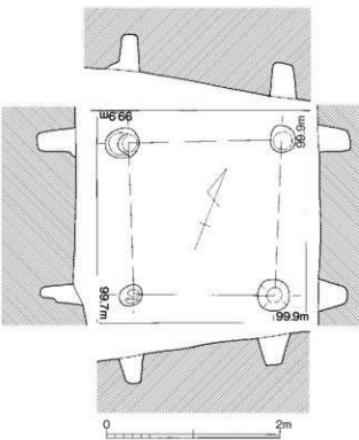
II区の東側で検出した1間×1間の建物跡である。1号掘立柱建物跡と重複し、また1号掘立柱建物に対して軸がやや西に振れている。建物の規模については東辺から時計回りに1.8m、1.6m、1.7m、1.8mを測り南側の柱間が狭くなるものの、6尺等間で設計されたものと思われる。柱掘方は径25~30cmの円形である。1号掘立柱建物跡と同様、柱掘方の底面は地形に沿って東から西に低くなっている。

（2）竪穴状遺構

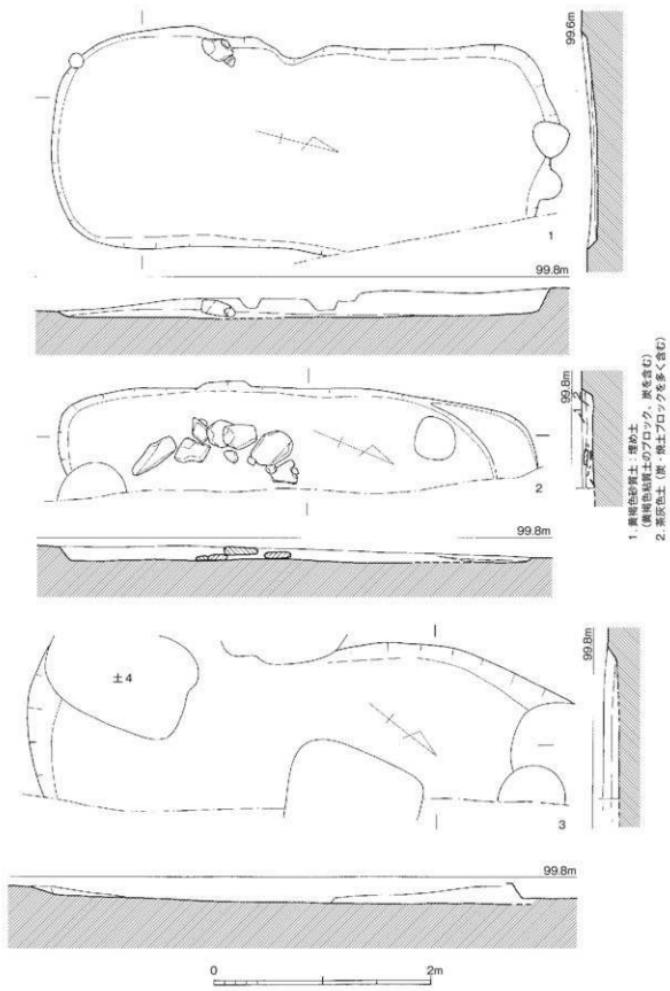
III区において3基を確認した。平面形はいずれも長円形に近い隅丸方形プランで、壁は竪穴住居跡のように垂直ではなく緩く立ち上がる。土坑ではあるが、遺構の規模・プラン・性格の共通性から発掘調査時に付した「竪穴状遺構」の名称をそのまま用いて報告する。

1号竪穴状遺構（図版12、第18図）

III区の北半部で確認し、南西隅部は調査区外となる。平面形は長円形に近い隅丸長方形である。規模は南北4.7m、東西2.05m、深さは最も深いところで25cmを測る。底面はほぼフラットであるが、壁は底面から緩やかに立ち上がっている。遺構内に幾つかのピットが存在するが、いずれも遺構検出段階から確認されていたもので、1号竪穴状遺構に伴うものではない。埋土は茶灰色土で、土師



第17図 2号掘立柱建物跡実測図(1/50)



第18図 1～3号堅穴状遺構実測図 (1/40)

器が出土している。

出土土器（図版 15、第 19 図）

土師器（1～7） 1～4 は小皿。1・3 のように体部が立つものと、2・4 のように開くものがある。糸切り。口径 7.0～8.6cm、底径 5.5～7.0cm、器高 1.2～1.5cm を測る。5 は杯。底径が小さく、体部が開くタイプである。糸切り。6 は高台杯。7 は皿。

白磁（8～12） 8 は杯。体部が直線的に延び、口縁部が厚みを減しながら収束するもの。体部の底部近くは露胎となる。体部内面に沈線をまわす。9 は高台の小片。見込みは輪状に搔き取り、砂目が残る。10 は碗の口縁部。嘴状になり、端部は面をなす。11・12 は皿。灰色の胎に灰色の釉を施す。

褐釉陶器（13） 壺の胴部の破片。外面とも成形時のヨコナデ痕が顕著である。外面には釉を施す。

須恵質土器（14） 捜鉢の口縁部の片口部分。内面にはわずかに筋目が残る。

2 号竪穴状遺構（図版 12・13、第 18 図）

Ⅲ区の北半部、1 号竪穴状遺構の東側で検出した。東側のラインは調査開始時の雨水処理対策のために掘削した溝で削平する結果となってしまったが、東側は急傾斜で地山が急激に立ち上がっていいるため現状の幅を大きく越えることは無く、幅 1m ほどに復元できる。長さは 4.4m を測る。底面はほぼフラットであるが、壁は底面から緩やかに立ち上がっている。北側には浅いテラスがある。深さは 15cm を測る。また、遺構の中央部よりやや南寄りから径 10cm から 40cm の礫がかたまって出土した。多くは床面に接していたが、意図を持って規則的に配置された状況は見い出せない。埋土は大きく 2 層に分かれ、上層は黄褐色粘土（地山と同じ）のブロック及び炭を含む、黄褐色砂質土（地山と同じ）で、下層は炭と焼土ブロックを多く含む茶灰色土であり、上層は意図的に埋め戻されている。埋土中からは折り重なるような状態で多数の土師器が出土した。一部に坏が 2 枚重なった状態のものも見受けられたものの、多くは細片化していた。

出土土器（図版 16、第 19 図）

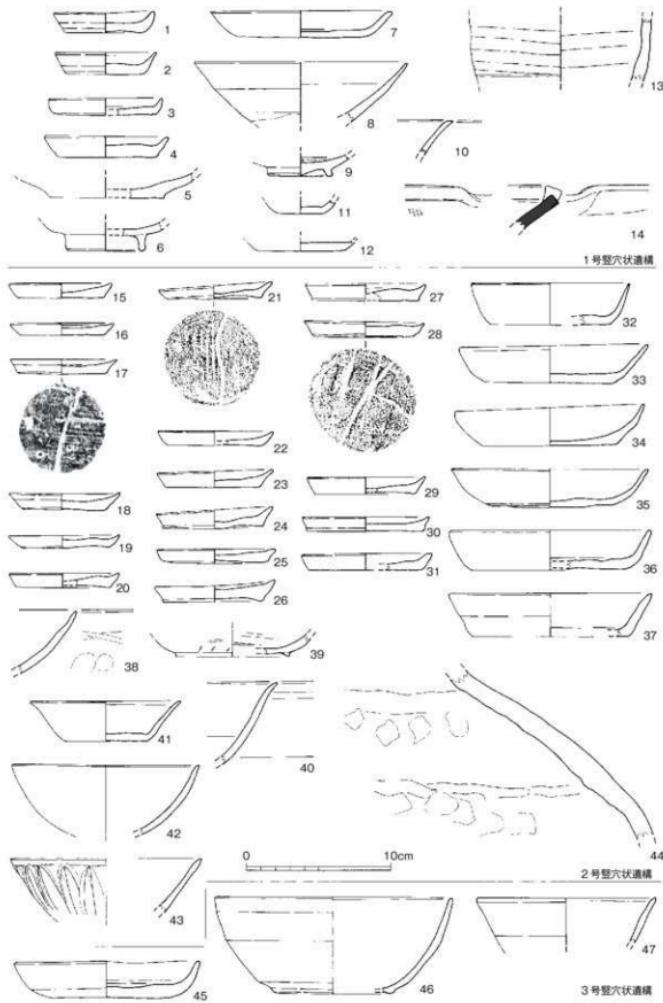
土師器（15～37） 15～31 は小皿。体部は短く開くものが多いが、19・22 のように直立気味になるものもある。糸切り。いずれも底部内面はナデ調整。17・22・27・28 の底部外面上には板状圧痕が残る。口径 7.1～9.0cm、底径 5.8～8.0cm、器高 1.0～1.4cm を測る。32～37 は杯。34・35 のように体部が丸みをもつものと、33・37 のように直線的に開くものがある。いずれも底部内面はなで調整。34 の底部外面上には板状圧痕が残る。法量は 32 が口径 10.8cm、底径 8.0cm、器高 2.4cm、その他は口径 13.1～14.0cm、底径 9.0～11.9cm、器高 2.4～3.0cm を測る。糸切り。

瓦器（38・39） いずれも碗。38 の内面には漆が付着しており、漆容器と考えられる。39 は断面三角形の高台を貼付する。38・39 ともに調整は内外面ともミガキ。体部外面上の下位には指頭圧痕が残る。

白磁（40・41） 40 は端反りの碗。白色の胎に白色の釉を施す。41 は皿。口縁部がやや反る。白色の胎に白色の釉を施す口禿の碗。底部は露胎であるが釉垂れがみられる。

青磁（42・43） 42・43 ともに龍泉窯系の碗。42 は体部が丸みを帯びる器形で、灰色の胎に深みのある緑色釉を施す。43 は鶴蓮弁を彫り出したもの。灰色の胎に発色の良い緑灰色の釉を施す。貫入がみられる。

陶器（44） 壺の肩部の破片。外面の調整はタタキ後ナデ。内面は粘土帶の継ぎ目が残り、また接



第19図 1~3号堅穴状遺構出土土器実測図 (1/3)

合のための指頭圧痕が顕著である。外面には部分的に自然釉がかぶっている。

3号竪穴状遺構（図版12、第18図）

Ⅲ区の中央部、2号竪穴状遺構の南側で検出した。2号竪穴状遺構の南側半分に切られ、中央部を5号土坑に、南端部を4号土坑に切られている。規模は現存長5.0m、幅1.5mである。幅については前述したように地形の関係から最大18mとなる。床面はほぼフラットで、壁は底面から緩やかに立ち上がっている。また、この遺構に伴うと考えられるピットは確認できていない。土師器片が多く出土した。埋土は茶灰色土である。

出土土器（図版16、第19図）

土師器（45）杯。全体的に厚いつくりである。口径13.0cm、底形8.5cm、器高2.5cmを測る。調整は底部内面がナデで、底部外には板状圧痕が残る。

瓦器（46）深みのある椀で断面四角形の低い高台を貼付する。調整は外面がミガキ。内面には漆が付着していることから漆容器と考えられる。復元口径16.6cm、高台径8.4cm、器高6.7cmを測る。

白磁（47）口禿の碗。白色の胎に灰味がかかった釉を施す。

（3）土坑

1号土坑（図版13、第20図）

1号土坑はⅡ区の南西部、2号掘立柱建物跡の南側に位置する。平面形は楕円形で、規模は長さ1.26m、幅0.62m、深さ0.2mを測る。東側を除いてテラスをもつ。壁は底面から擂鉢状に緩やかに立ち上がっている。深さは最も深いところで0.13mを測る。西側のテラスの端部で底部を上に向けた土師器環が1点出土した。

出土土器（図版16、第21図）

土師器（1）杯。体部が厚手である。調整は摩滅が著しく不明。底部外には板状圧痕が残る。口径13.0cm、底形10.3cm、器高2.8cm。

2号土坑（第20図）

2号土坑はⅡ区の中央部、3号溝に接して検出し、3号溝に切られている。平面形は楕円形で、長さ1.95m、現存幅0.77m、深さ0.21mを測る。底面はフラットで壁は緩やかに立ち上がる。

出土土器（図版16、第21図）

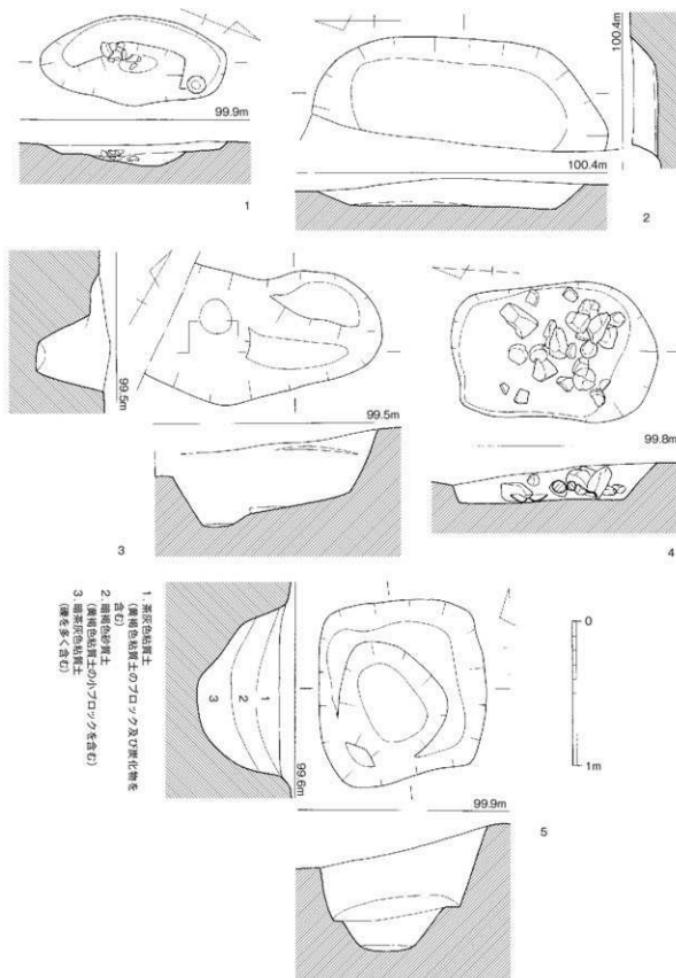
青磁（2）龍泉窯系の碗。鎌運弁を彫り込む。胎は灰色で釉は緑色。

3号土坑（第20図）

Ⅲ区の西壁際、1号掘立柱建物跡の西側で検出した。西側の一部は調査区外に延びる。平面形は楕円形で、東側に階段状になる二つのテラスをもつ。規模は長さ1.47m、幅0.96m、深さ0.63mを測る。

出土土器（図版16、第21図）

土師器（3～10）杯。多くは体部が内湾気味に立ち上がるが、7は口縁部が大きく反っている。法量は口径11.9～13.6cm、底径7.9～11.2cm、器高2.6～3.0cmを測る。調整が確認できるものはい



第20図 1~5号土坑実測図 (1/30)

ずれも底部内面がナデで、4～6の底部外面には板状圧痕が残る。いずれも糸切り。

青磁（11）碗。灰色の胎に緑灰色の釉を施す。

4号土坑（図版13、第20図）

III区の南半部、3号竪穴状遺構と重複して検出した。3号竪穴状遺構を切る。平面形は長方形に近いが、南側は弧状になっている。規模は長さ1.44m、幅0.97、深さ0.19mを測る。底面はフラットで、壁は緩く立ち上がる。中央部やや北寄りに土師器の壊が並んでおり、また、その南側一帯から径10～25cmほどの礫群が出土した。土師器と一部の礫は底面に密着している。土坑の形状や土師器の出土状況から墓である可能性も考えておきたい。

5号土坑（図版14、第20図）

III区の中央部、3号竪穴状遺構と重複して検出した。3号竪穴状遺構を切る。平面形は方形で、明瞭な稜がつくものではないが二段掘りになっている。規模は南北1.3m、東西1.2mである。深さは0.8mを測る。埋土は3層に分かれ、土層断面の観察では自然堆積の層位を示している。陶磁器などの遺物が出土した。

出土土器（図版16・17、第21図）

土師器（12～28）12～19は小皿。13・19のように体部が直立気味に立ち上がるものと、開くものとがある。13は器壁が厚い。いずれも底部内面はナデ調整で、19の底部外面には板状圧痕が残る。法量は口径5.7～8.4cm、底径5.0～7.9cm、器高0.8～1.3cmを測る。糸切り。20～28は杯。22は体部が直線的だが、その他は口縁部が外反している。底部内面はいずれもナデ調整。22～26の底部外面には板状圧痕が残る。法量は口径12.4～14.0cm、底径8.2～10.8cm、器高2.3～3.1cmを測る。29は瓶もしくは鍋。口縁部が外反し、口縁部の下に把手の貼付痕とみられる剥離面がある。外面には煤が付着している。

青磁（30）鎬運弁を片切彫りした碗。口縁部はわずかに外反する。灰色の胎に緑色釉を施す。釉の発色は良い。

褐釉陶器（31）中国製の鉢もしくは壺。口縁部はく字形に外反し、端部は肥厚する。外面に暗褐色の釉を施すが発色はよくない。復元口径は約30cmを測る。

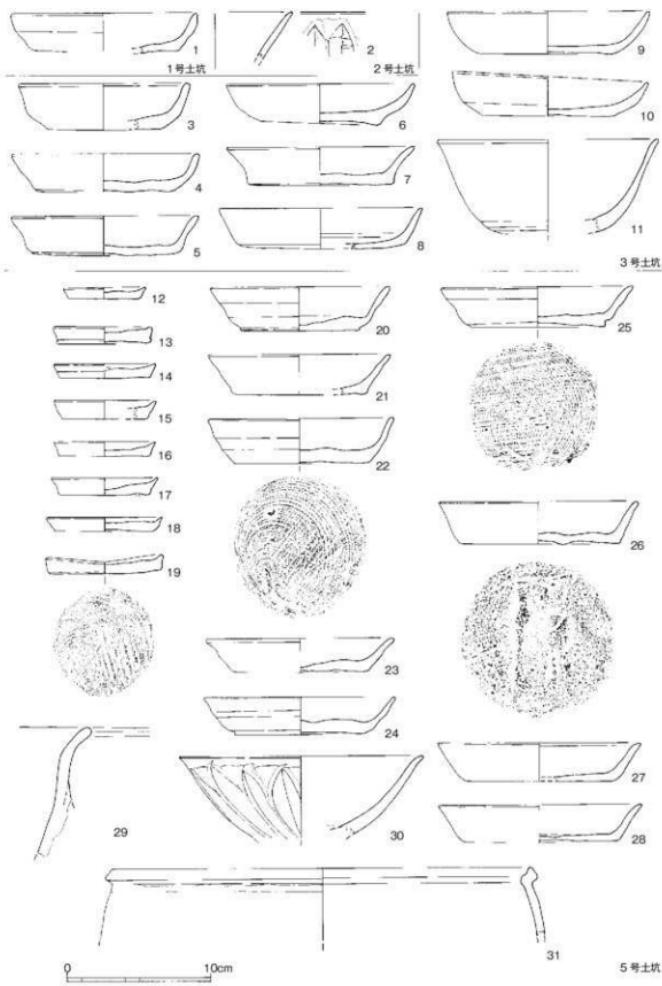
（4）溝

1号溝（図版11・12、第15図）

II区の南側で確認した東西方向の溝で、東側から西側にかけて流れる。9m分を確認した。東側は収束しているが、西側は調査区外に延びる。幅は0.7mを測り、断面形状はV字形である。東側半分の南側はテラス状になっているが、当初の浅い溝を掘り直してV字形の深い溝にやり替えた痕跡である。埋土は茶灰色土で、上下2層に分かれ、土層断面の観察によると自然堆積により埋没している。1号掘立柱建物跡とは方向を違えるが、後述するように2号溝と一連の遺構である可能性が高いため、掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。

出土土器（第25図）

青磁（2）碗の口縁部の破片。白色の胎に乳白色の釉を施す。釉には貫入が見られる。



第21図 1~3・5号土坑出土土器実測図 (1/3)

青磁（2） 皿。外反する口縁にハ字形に踏ん張った高台を削り出している。見込みの砂目が残る。胎は暗灰褐色でやや粗く、化粧土をかけた後に櫛書きを施し、灰色の釉をかけている。李朝青磁。

2号溝（第15図）

II区の中央部で検出した南北方向の溝で、旧地形の段落ちの際に掘削されている。埋土中からの出土遺物は皆無であったが、位置関係からみると西側の1号掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。13m分を確認した。上端幅1.0mを測る。この溝の南側については収束しているが、埋土が1号溝と同じ土質、土色であることから、1号掘立柱建物跡を区画しつつ、段落ち部の排水処理を行う機能を持った1号掘立柱建物跡に伴う施設と思われる。

3号溝（第15図）

II区の中央部で検出した南北方向の溝で、長さ6.5m分を確認した。上端幅0.5～0.6mで、深さは10cm。この溝は1号掘立柱建物跡と軸を合わせてその東側に位置するため、2号溝とともに1号掘立柱建物跡に伴う遺構と考えられる。

4号溝（第15図）

II区の北西部で検出した暗渠である。埋土には土管が埋設されており、近代以降の所産である。この延長はIV区・V区で確認している。

5号溝（第15図）

II区の中央部で検出したL字形に折れる溝状の遺構である。形状も不明瞭でかつ深さも5cmほどと浅いことから、溝というよりもむしろ溜まり状の遺構としたほうがよいのかもしれない。

6号溝（第15図）

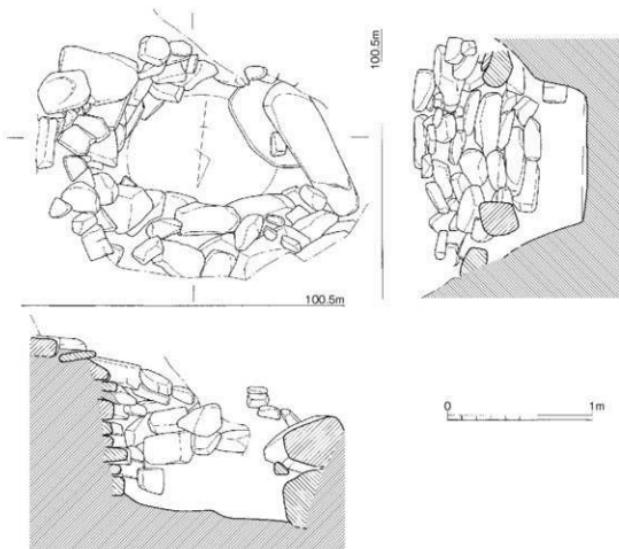
II区の南東部で検出し、南側はさらに調査区外の東側に延びる。幅は5cmから10cmほどで一定でなく、深さについては移植ごとで可能な深さまでは掘削したが底面に地山が出ない箇所がほとんどである。その下層の断面観察は行ってはいないが、平面形と断面形状から地震などによる地割れ痕跡とも考えられる。

7号溝（第15図）

II区の南西隅で検出した東西方向に走る溝である。上端幅30cm、深さ5cmほどを測り約5mを確認したが両側は収束している。

8号溝（第15図）

I区の南端部で検出した。埋土は暗灰色でI区とII区の間を東西に走る里道に伴う溝と考えられる。



第22図 溝井状遺構実測図（1/30）

(5) その他の遺構

溜井状遺構（図版14、第22図）

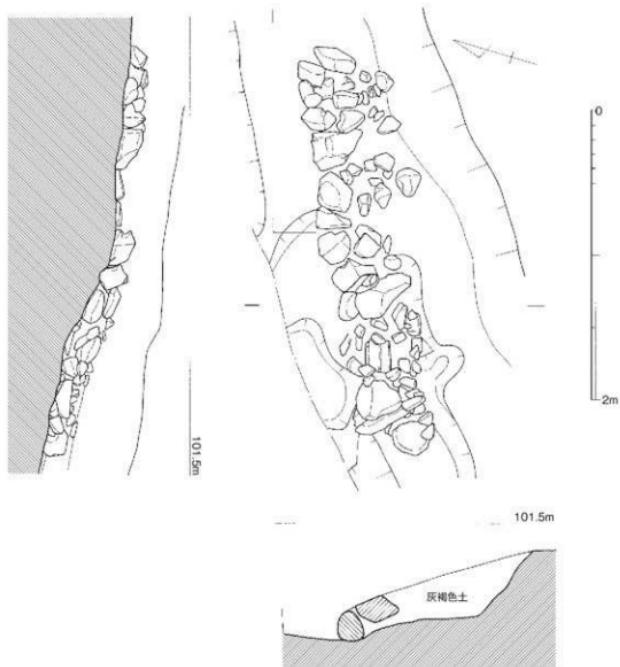
Ⅲ区の北東部で検出した溜井状遺構もしくは井戸である。東から迫る丘陵裾にあたるこの部分は浅い谷地形になっており、その地を選んで設置されている。明確な掘方はなく、岩盤を掘削した後、その縁辺に石組みを行っている。水を溜める部分は南北0.9m×東西1.1mで、深さは1.3mを測る。斜面下位にあたる西側には長さ1mにおよぶ最大のものを含め大きめの石で、且つ厚みがあるものを配置する。その他の部分は長さ15～50cmの角礫をほぼ垂直に積み上げて井戸枠を構築しているが積み方は乱雑である。また、北側の壁は内側にせり出し、一部損壊している。この遺構が構築された時期は不明であるが、埋土は暗灰色の粘土で、埋土からは現代の遺物が出土している。

出土土器（第25図）

青磁（4）肥前系の青磁の壺。胎は暗灰褐色で緑色釉を施す。貫入がみられる。

石列（図版14、第23図）

Ⅱ区の北端部で検出した東西方向の石列である。発掘区の東側の高台の平坦面（一段目）の裾部に20～30cm程の礫を並べ、一部は二段に積む。その内側に灰色の砂質土と径10cmほどの礫を充填している。Ⅰ区とⅡ区の間には里道が走っており、里道を挟んだ北側の低い方では8号溝を確認していることから、石列はこれと対になるものであり、段落ちの保護の機能を持つ遺構とみられる。



第23図 石列実測図(1/30)

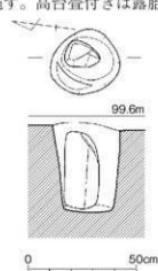
出土土器(図版17、第25図)

陶器(5)肥前系の碗。釉は内面が茶褐色、外面は黄味を帯びた緑色釉を施す。高台壇付きは露胎となる。石列の裏込から出土した。

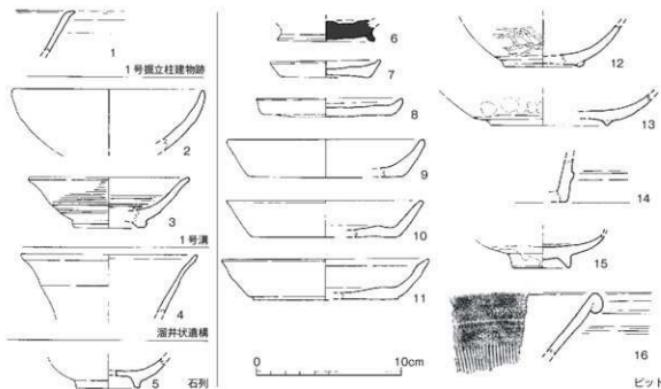
ピット(第24図)

ピットは調査区の全面域において確認した。このうちⅢ区では、柱掘方の埋土中に壁体とも考えられる焼土(図版19-a)を充填している例がいくつかみられた。P 205はⅡ区西半部、1号掘立柱建物跡の南西側で検出した。径30cm、深さ41cmの通常のピットであるが、長さ36cm、径15cmの砂岩質の角礫が埋まっていた。礎盤には大きすぎ、あるいは1号掘立柱建物跡に伴う地鎮などの可能性も考えられるものの、性格を詳らかにし得ない。

ピット出土土器(図版17、第25図)



第24図 ピット実測図
(1/20)



第25図 その他の遺構出土土器実測図 (1/3)

須恵器（6） 高台杯の破片。高台は断面四角形で厚みはないがハ字形に踏ん張っている。近隣に奈良期の遺構が存在したことを窺わせる資料である。

土師器（7～11） 7・8は小皿。糸切り。9～11は杯。糸切り。

瓦器（12・13） ともに碗で、断面三角形の低い高台を貼付している。12の外面の調整はミガキ、13が体部下位に成形時の指頭圧痕が残る。

瓦質土器（14） 火鉢の底部破片。外面に断面三角形の突帯を巡らせる。

染付（15） 肥前系の染付碗。見込みを輪状に釉剥ぎする。

陶器（16） 摺鉢。口縁部を折り返して端部を玉縁状に肥厚させる。内外面に鉄釉を施す。内面には筋目が残る。

(6) 層位等出土土器

茶褐色土層・構築検出時出土土器 (図版17、第26図)

1～9は遺構面を覆う茶褐色土層から出土した。10～23は遺構検出時に出土したものである。

土師器（1） 小皿。底部内面はナデ。

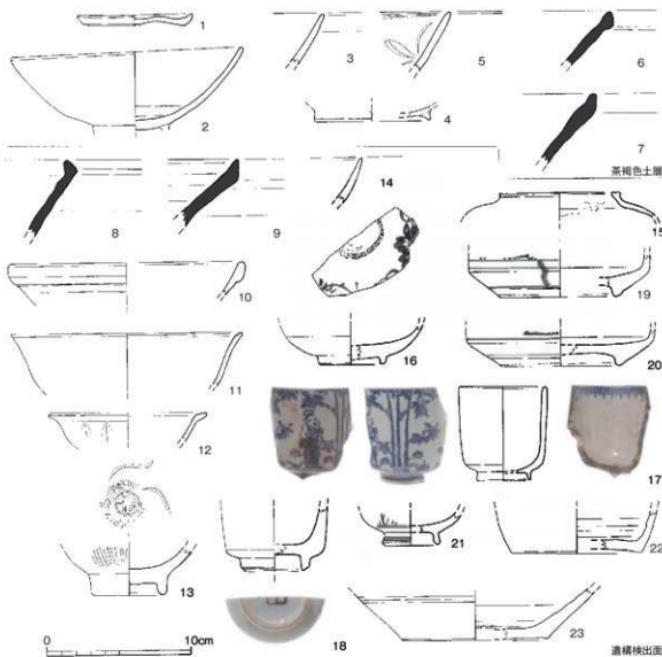
瓦器（2～4） 碗で、調整はいずれもミガキ。2の体部下半には成形時の指頭圧痕が残る。4は底部の破片で、断面三角形の高台を貼付する。

青磁（5） 龍泉窯系の碗の口縁部。内面にヘラ状工具の先端部で花文を彫る。胎は灰色で深みのある緑釉を施す。

須恵質土器（6～9） 6は口縁部を断面三角形状に整える。8は口縁端部を逆く字形に折り曲げる。いずれも鉢で筋目は残っていないが、6・8の内面は磨れて器面が平滑になっている。

白磁（10） 口縁部が玉縁になる碗。胎は白色で乳白色の釉を施す。

青磁（11～13） 11は口縁部が外反気味になる碗。口縁端部内面に段をもつ。12は口縁端部が外



第 26 図 茶褐色土層・遺構検出面出土土器実測図 (1/3)

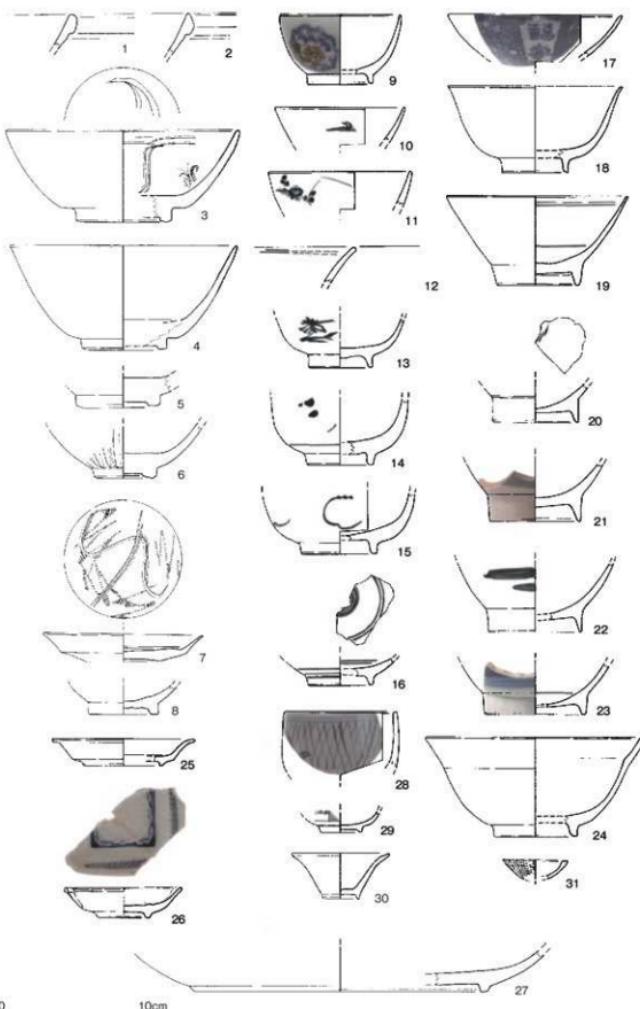
側に屈曲して聞く小碗。外面に鎧蓮弁を施す。13も小型の碗。灰色の胎に厚い緑色釉を施す。貫入がみられる。外面に蓮弁を意図したとみられる沈線を掘り込む。また見込みには花文を片切彫りする。底部内面は蛇の目状に釉を搔き取っている。

天目(14) 碗の口縁部。内外面に黒茶色の釉を施す。

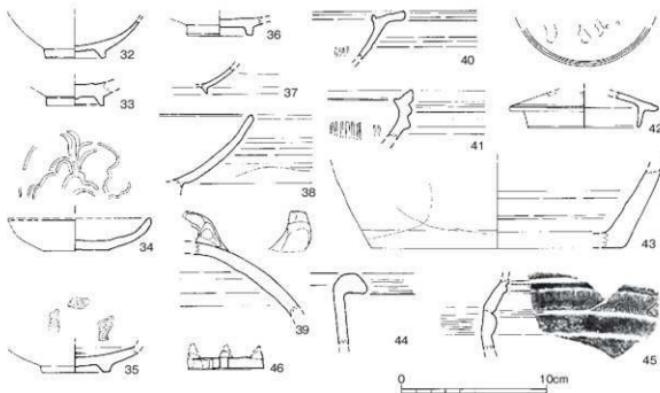
陶器(15) 褐釉陶器の壺。肩が張り長胴になるもの。口縁端部は肥厚させ、上面には面をなす。外面から口縁部内面にかけて褐色の釉を施す。

染付(16～21) 16は碗。見込みに花文を描く。見込みは幅狭の輪状に搔き取っている。17・18は湯呑み。17の外面には竹と人物をコバルトで型紙摺りしている。また口縁部の内面にはラマ式蓮弁を巡らせる。18は湯呑みの下半部の破片。底部外面にゴム印判を押す。19・20は役重。20の外面は赤絵の染付が認められる。

陶器(21～23) 21は陶器碗。高台は高くハ字形に聞く。22は壺。外面に暗灰色の釉を施し、内面及び底部外面は露胎となる。内面にはヨコナデの稜が明瞭に残る。23は壺。外面に光沢のある褐色の釉を施す。底部内面と外面には砂目が残る。



第27図 その他の層位出土土器実測図1 (1/3)



第28図 その他の層位出土土器実測図2 (1/3)

その他の層位出土土器 (図版17・18、第27・28図)

IV・V区付近の表土やⅢ区上面の斜面上位からの崩落土から出土したものを報告する。

白磁（1・2）ともに口縁部が玉縁となるものである。

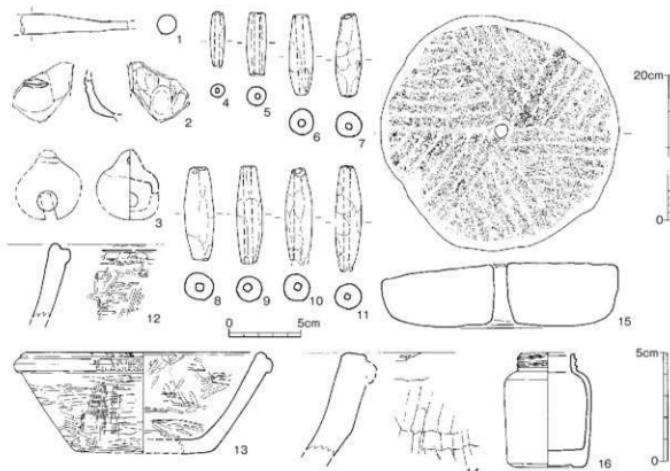
青磁（3～7）3は灰色の胎に茶味がかった緑色の釉を施す。内面に花文を施す。4は灰色の胎に緑色の釉を施す。見込みにも施紋されるが欠損しているため全体像はわからない。6は外面に鏽蓮弁を片切彫りする。釉は灰味を帯びた緑色。いずれも龍泉窯系で、高台壘付は露胎となる。7は皿。灰色の胎に茶味を帯びた緑色釉を施す。見込みの片切彫りの草花文と櫛歯文を描く。底部外面は露胎となる。同安窯系。

天目（8）碗の底部。内面に黒色釉、外面に茶褐色の釉を施す。底部外面から壘付にかけては露胎となる。

染付（9～23）9は体部に芙蓉と鳳凰からなる銅板刷を施す染付碗。瀬戸産。10～15は外面に呉須で草花文を描く。12はやや粗い黄茶色の胎に灰味がかった薄い透明釉を施す。呉須は黒っぽい。安南産とみられる。16は外面の体部と高台部の境及び見込みに界線を巡らせる。17は型紙刷りの染付。外面の全面に草花文を施しつつ「福寿」の銘文で区画する。18は口縁部が外反する。外面に呉須で鳥文を描く。20は見込みに文様がある。19～23は広東碗。20～23は外面に草文を描く。口縁部が体部上方で屈曲して開く碗。釉は薄く、発色もよい。伊万里系。25は口縁部が強く外反する高台皿。26は角皿で角部は丸みをもつ。見込みに花文の型紙刷りを行う。底部外面にはスタンプ文があるが欠損しているため全形はわからない。27は中型の皿。外面に唐草文と界線、内面に草文を施す。釉の発色は良い。高台壘付は露胎となる。28は湯呑み。外面に網目文を施す。29は猪口。

白磁（30・31）30は杯。薄い透明釉を施す。伊万里系。31は紅皿。放射状の花文を型押しする。

陶器（32～43）32・33は碗。釉は灰色。見込みは螺旋状にヨコナデを行う。33輪状に掻き取る。



第29図 出土銅製品・土製品・石製品・ガラス製品実測図 (1・3・16:1/2, 15:1/6, その他は1/3)

34～38は皿。34は茶味がかった灰釉を施す。見込みには花文を彫りだしている。貫入が目立つ。高取系か。35は内外に灰色釉を施す。脛付は露胎となる。見込みには砂目が残っている。37は緑灰色の釉を施すが、体部外面及び底部外面は露胎となる。38は外面にヨコナデによる凹凸が著しい。39は壺の肩部。縦位に環状の耳が付く。胎は赤紫色。40・41は摺鉢。40は口縁端部に鈎状の縁がまわる。41は体部が内湾し、口縁部は斜め上方に屈曲して端部をつまり上げる。いずれも内面に筋目が残るが単位はわからない。42は土瓶の蓋。端部に沈線を巡らせる。外面に灰釉を施すが返りと内面は露胎となる。43は壺の底部。外面には灰色の薬灰釉がかかり、内面と底部外面は露胎となる。

瓦質土器 (44・45) 44は火鉢。調整は外面がミガキ、内面はヨコナデ。45は香炉か。胴部の屈曲部のやや上に断面三角形の二条の突帯を貼付する。屈曲部と突帯の間は二段になった亀甲文のスタンプで埋める。

窯道具 (46) ハマ。径 5.3cm、厚さ 0.8cm の円盤の中央部に径 0.6cm の孔をあけ、円盤の上面端部に均等に四つの円錐形の粘土塊を貼付する。円盤は糸切り離し。表土出土。

(7) その他の出土遺物

青銅製品 (図版19、第29図)

煙管 (1) 青銅製の煙管の吸口。両端を欠損する。最大径 0.9cm を測る。ピット出土。

土製品 (図版19、第29図、表2)

遺物番号	出土遺物	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (mm)	重さ (g)	備考
4	1号堅穴式遺物	3.8	1.0	2.0	3.8	
5	P199	4.3	1.3	2.0	4.3	
6	P55	5.6	1.6	3.0	5.6	
7	2号堅穴式遺物	5.7	1.6	3.0	5.7	
8	2号堅穴式遺物	6.3	2.1	5.0	6.3	
9	1号堅穴式遺物	6.6	1.8	4.0	6.6	
10	2号堅穴式遺物	6.9	1.8	3.0	6.9+	一部欠損
11	1号堅穴式遺物	7.2	1.8	2.0	7.2	

第2表 土器一覧2

土製人形(2) 型成形された人形の顔の部分。内面には指頭圧痕が顯著に残る。表土から出土した。
土鉢(3) 径 2.8cm の球形で、上部に鉢が付く。玉の径は 0.6cm。胎土は精良。

管状土錘(4~11) 長さ 3.8~7.2cm、径 1.0~2.1cm を測る。孔の形状は 4~7 が円形、7~11 は方形。
5 がピット、7・8・10 が 2 号堅穴状遺構、その他は 1 号堅穴状遺構出土。

石製品(図版 19、第 29 図)

石鍋(12~14) いずれも口縁下に鉢を回すタイプの滑石製石鍋。鉢の出は短い。12・13 の外面は横方向に細かいノミの痕跡が残る。内面は平滑になっているが、13 の内面には横方向のノミ痕が遺存する。13 の法量は口縁部径 18.0cm、底部径 9.8cm、器高 7.0cm を測る。Ⅲ区北端の谷部から出土。14 は鉢の部分を欠損する。外面の調整は縦方向に削って仕上げている。12・14 は 1 号堅穴状遺構から出土。

石臼(15) 下臼。径 33cm、最大厚 9.0cm を測る。縁部は欠損している部分があるが完形に近い。軸穴は径 1.8cm。目は 6 分割される。表土出土。

ガラス製品(図版 19、第 29 図)

瓶(16) ねじ蓋式の瓶の身。色調は薄紫色で気泡を多く含む。成形は型合わせによる。法量は高さ 5.2cm、径 4.0cm を測る。表土から出土。42 g。

V おわりに

知恩寺は豊臣秀吉による九州征伐の際の激戦地として知られる岩石城跡の戦いにおける死者を弔った寺院である。岩石城の南側の出城の城主であった佐々木平左衛門(正圓)が興したとの由緒があり、その創建は江戸時代初期の元和年中(1615~1624 年)に遡る。その後、天正 9 年に現在地の市街地に移転するまでは今回の調査地に存在していたとされる。知恩寺跡の 2 次にわたる発掘調査では、掘立柱建物跡 5 棟、土坑 13 基、溝 12 条のほか、池状遺構、盛土状遺構、溜井状遺構、多数のピットを確認した。このうち創建期の知恩寺に関わる遺構は確認できなかつたが、池状遺構の掘削は出土遺物により江戸期まで遡るため、知恩寺に伴う可能性を考えてよいだろう。

5 棟の掘立柱建物跡はいずれも丘陵斜面を切り盛りした造成面に建つ。そして第 1 次調査における 1 号掘立柱建物跡と 2・3 号掘立柱建物跡の重複関係から、少なくとも二時期にわたることが知れる。また、2 号掘立柱建物跡と 3 号掘立柱建物跡は並列し、且つ、梁の柱列も筋が通ることから併存したと考えている。第 1 次調査で検出した建物群と第 2 次調査の 1 号掘立柱建物跡とが共存していたかどうかはわからないが、後述するように周辺で検出した遺構の様相から考えると、少なくとも近接する時期の所産であるといえる。このうち最も規模が大きな 1 号掘立柱建物跡の柱掘方は直径 60cm ほどと大きいが、平面積は約 32m² と、中世期としては突出した規模ではない。これら建物跡の時期については、1 次 1 号掘立柱建物跡や 2 次 2 号掘立柱建物跡の柱穴から出土した遺物から 13 世紀代と考えられる。

建物以外では、出土遺物から時期が特定できるものに堅穴状遺構と土坑がある。堅穴状遺構は 3 基が近接して存在する。いずれも埋土中に多くの土師器と土師器小皿が一括投棄された後に人為的に埋め戻された状況で、かつ埋土に焼土と炭化粒を含む点で共通する。1 号堅穴状遺構では口禿の白磁碗、2 号堅穴状遺構では口禿の白磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗が伴う。これらの陶磁器に伴う

土師器の法量は、杯の場合が口径 13.0 ~ 14.0cm、底径 9.0 ~ 9.4cm、器高 2.6 ~ 3.0cm、小皿では口径 7.0 ~ 8.2cm、底径 6.7 ~ 7.0cm、器高 0.9 ~ 1.2cm を中心とした分布域を示している。2・3号竪穴状遺構とも法量分布に明確な差はみられない。竪穴状遺構を切る 5 号土坑やこれらの遺構に伴う整地とみられる盛土状遺構に関しても、土師器の法量、陶磁器の組成とも同じような傾向であり、石鍋では口縁部下に削り出された鈎の出が短いことや、底径が小さくなることなど新しい傾向もみられるものの、遺物群の様相から 13 世紀代に位置づけて大過ないと思われる。なお、竪穴状遺構の性格については、たとえば小皿には油煙が付着したものは見当たらないが、上に挙げた点や遺構の形状も含めた在り方、部分的に欠損した遺物が目立つことなどから祭事等で用いられた遺物を一括廃棄するために連続的に土坑が掘削され埋め戻されたものと推測される。また、3号土坑は杯の法量が平均 13.1cm と竪穴状遺構出土土器よりも小さく、底径も口径に比べて小さく大きく聞く器形も含まれることから 14 世紀まで下るものとみられる。

以上、今回の調査では 13 ~ 14 世紀代を中心として、江戸期、近代の遺構を検出した。創建期の知恩寺に直接関わる遺構は確認できなかったが、今回の調査ではそれを廻る中世期の遺構が営まれていたことが明らかとなった。あわせて、当該期の土師器・中国陶磁器・中国陶器・石鍋の良好な一括資料を得ることができた。なお、特に 2 次Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 区の表土及び新期埋め土から江戸期前半代を含む江戸期の遺物が多く出土していることや、調査区外東側斜面上位に人為的な段造成面が複数存在すること、その一つに江戸期の墓地が営まれていることから、2 次調査区Ⅲ 区西側の平坦部を含め、今回の調査箇所に近接して創建期の知恩寺の痕跡が遺存している可能性は高い。また第 1 次調査地から出土した銚鉄を用いた茶釜もしくは湯釜を知恩寺が所有していたとするこもあるがち否定できないであろう。

図 版

1 第1次調査
1区全景（北から）



2 1区全景（東から）



3 2区下段全景
(北から)



図版 2



1 2区上段全景
(東から)



2 3区全景 (北から)



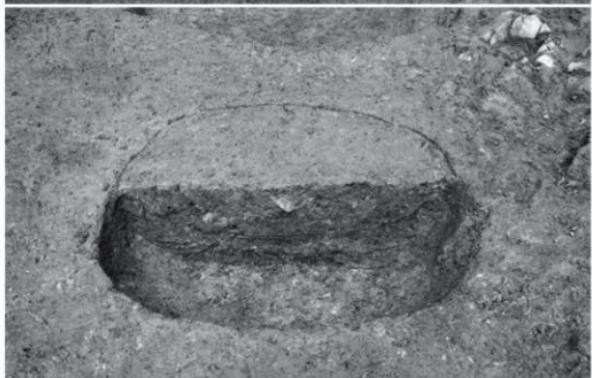
3 1号掘立柱建物跡
(西から)



1 2号掘立柱建物跡
(南から)



2 3号掘立柱建物跡
(南から)



3 1号土坑土層
(南から)



1 2・3号土坑（北から）



2 4号土坑（北東から）



3 5号土坑（西から）



1 6・7 号土坑
(西から)



2 8 号土坑 (西から)



3 SX-01 池状遺構
(北から)



1 SX-01 池状造構
護岸列石 (北から)

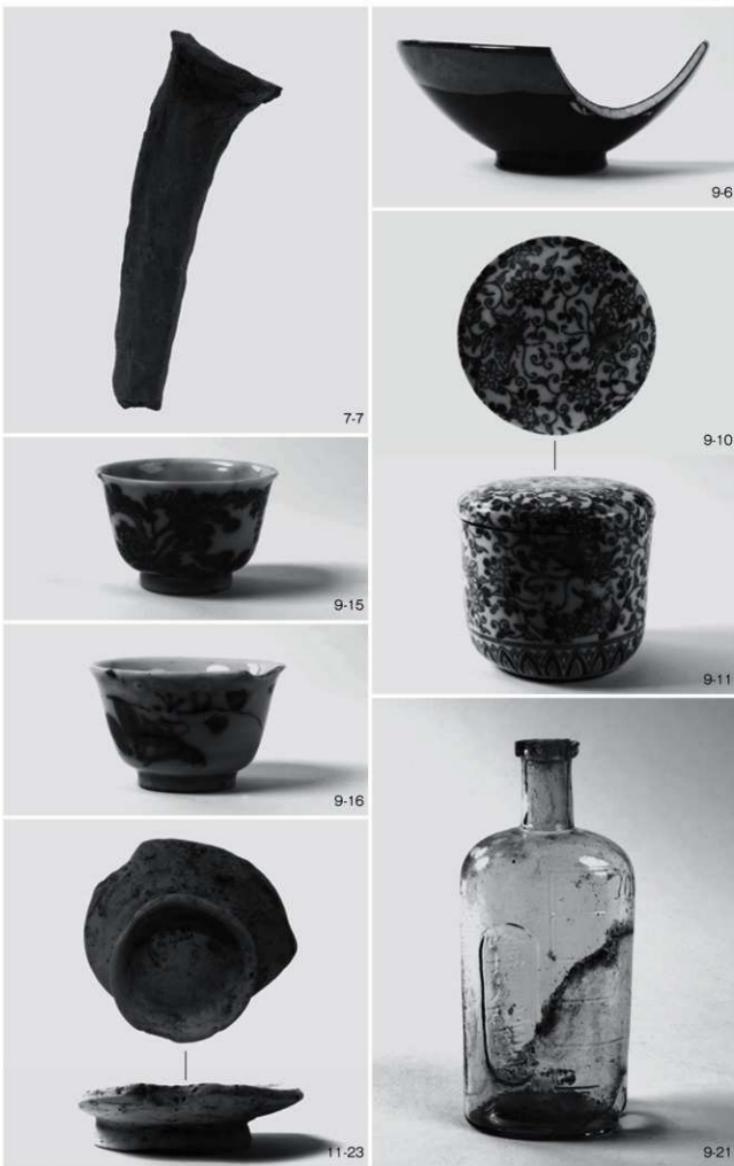


2 SX-02 盛土造構
完掘状況 (北から)



3 SX-02 盛土造構
土層 (東から)

図版 7



遺構等出土遺物

圖版 8



包含層等出土遺物



1 第2次調査区全景
(舗装部分は1次調査区
北から・空中写真)



2 I・II区全景
(左が北)



3 I区全景（南から）



1 III区全景
(左が北・空中写真)



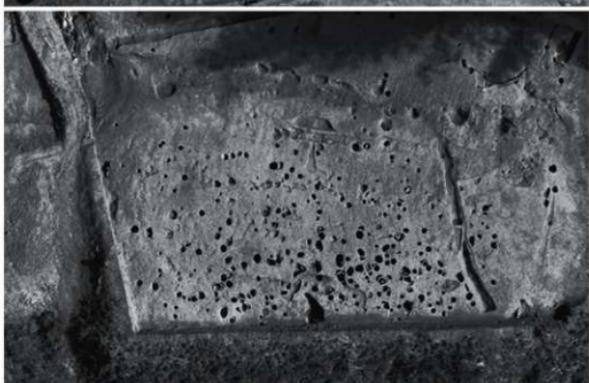
2 III区全景（南から）



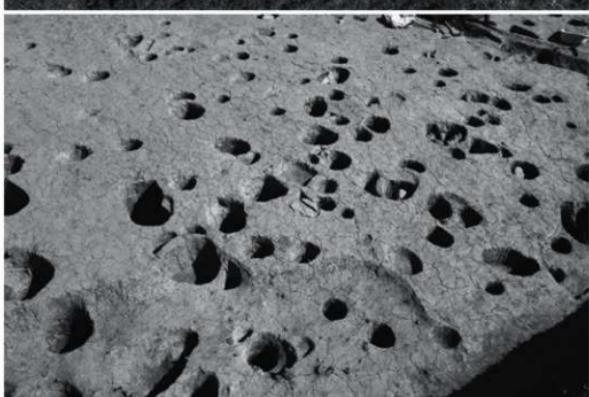
3 IV・V区全景
(北東から)



1 1号掘立柱建物跡
(南から)



2 1号掘立柱建物と
1号溝（左が北・空中
写真）



3 2号掘立柱建物跡
(北西から)



1 1号溝（西から）



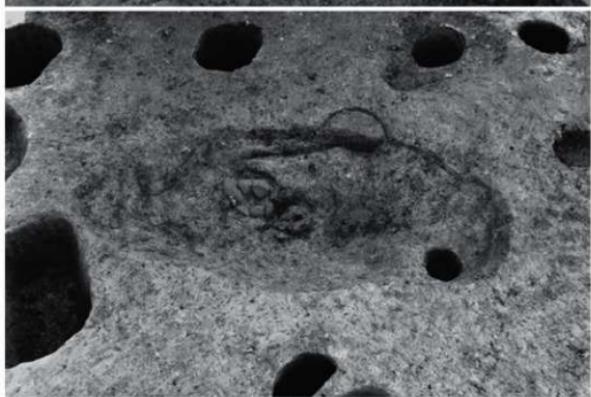
2 1・2号竪穴状遺構
(東から)



3 1～3号竪穴状遺構
(左が北・空中写真)



1 2号竪穴状遺構土層
(南西から)



2 1号土坑 (東から)



3 4号土坑 (北西から)



1 5号土坑（西から）



2 溝井状遺構（西から）



3 石列（北東から）



遺構等出土遺物 1

図版 16



遺構等出土遺物 2

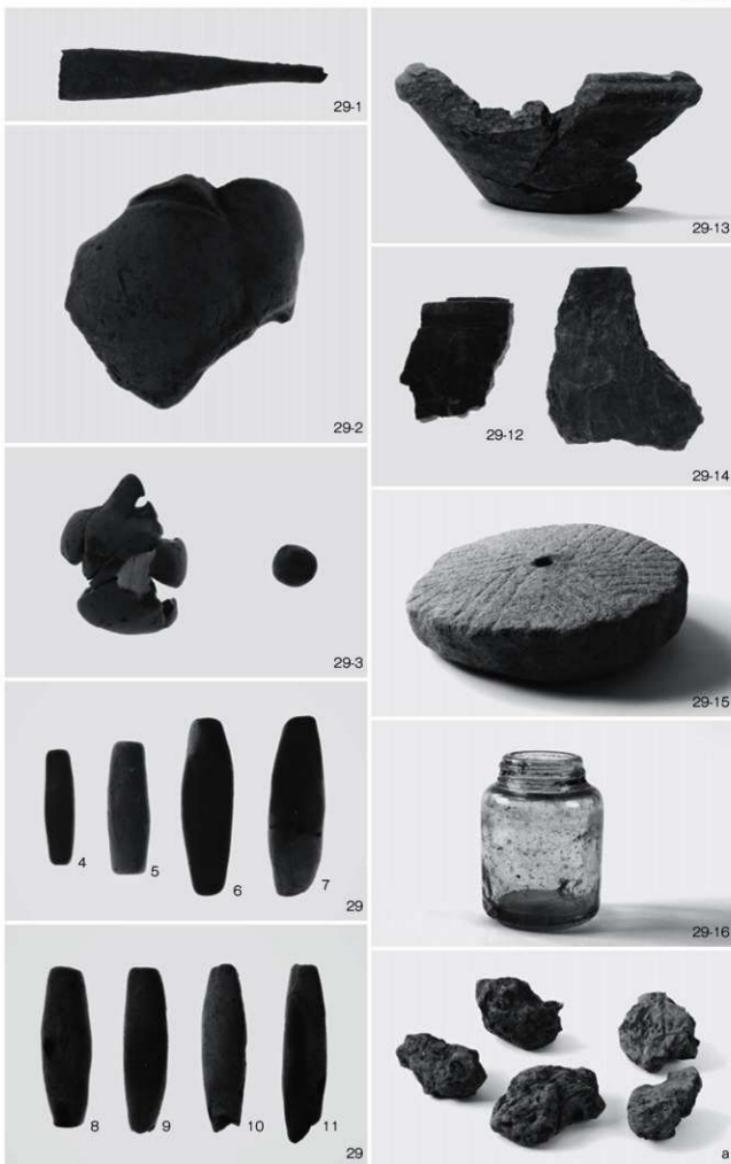


遺構・層位出土遺物

圖版 18



層位出土遺物



その他の出土遺物

報 告 書 抄 錄

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度	登録番号
28	6

福岡県文化財調査報告書 第259集

知恩寺跡

平成29年（2017年）3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園1丁目8-15